HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	貧困調査のクリティーク（2）：『排除する社会・排除に抗する学校』から考える
Author(s)	宮内, 洋; 松宮, 朝; 新藤, 慶 他
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 122, 49-91
Issue Date	2015-06-29
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.122.49
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59469
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12219452_122_49-91.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

貧困調査のクリティーク(2)

――『排除する社会・排除に抗する学校』から考える ――

宮内　洋*　松宮　朝**　新藤　慶***
石岡丈昇****　打越正行*****

【要旨】 本稿は，貧困調査のクリティークの第２弾として，西田芳正『排除する社会・排除に抗する学校』（大阪大学出版会，2012 年）を対象に，貧困調査・研究が陥りがちな諸課題を指摘した論考である。当該書は，1990 年代から西田が取り組んできた調査研究の知見を，貧困層の社会的排除という形でまとめ直したものである。当該書では，関西圏の「文化住宅街」や「下町」を中心的な対象とし，これらの地域に暮らす「貧困・生活不安定層」の生活や教育の実態・意識が明らかにされている。この研究に対し，「〈生活―文脈〉理解研究会」のメンバーが，理論的なレベル，方法的なレベル，そして若者，学校，地域という具体的なテーマのそれぞれの視点から批判的な検討を行った。これらの検討から浮かび上がったのは，当該書における〈文脈〉の捨象と，そのことが分析にもたらす問題である。本稿を通じて，貧困調査に求められる〈文脈〉のふまえ方が示された。

【キーワード】貧困調査，文脈，文化住宅，他者の合理性，「万能型フレーム」

はじめに

今から35年も前のこと，私が中学3年生の秋の出来事である。改造した制服で髪型はリーゼントスタイルの「ツッパリ」男子生徒に校舎内の階段踊り場で羽交い締めにされ，あやうく殴られそうになる，という経験をした。そのときの彼の眼を，今でも思い出せるような気がする。「教師の手先」で「ヘラヘラ目立ってムカツク」存在と思われていただろう私は，「殴られて当然」と自分でも思い，そして同時に，殴ろうとしていた彼らのことが「気にかかる」，「わかりたい」とも感じていた。（ｉ）[1]

本稿を，ある一人の研究者による回想の引用から始めた。これは，本稿で対象とする『排除する社会・排除に抗する学校』の冒頭で紹介されている著者，西田芳正本人の「記憶」である。

私たち「〈生活―文脈〉理解研究会」の成果の一つである「貧困調査のクリティーク（1）」（宮内ほか 2014b）では，社会心理学の基本的な一つのバイアスの説明を「はじめに」で述べたが，その続編である本稿の「はじめに」では心理学の重要な領域，それのみならず質的研究においてもきわめて重要な領域であるはずの記憶について少し確認をしておきたい。

現在においても「記憶」について誤解している人は多い。まるで，私たち人間の脳と感覚器官があたかもHDが備わったビデオカメラとその再生機器であるかのように誤解している人たちである。改めて確認しておきたい。それは大きな誤解である。様々な情報が記銘される

* 高崎健康福祉大学人間発達学部准教授　** 愛知県立大学教育福祉学部准教授　*** 群馬大学教育学部准教授
**** 北海道大学大学院教育学研究院准教授　***** 社会理論・動態研究所研究員
DOI：10.14943/b.edu.122.49

際に，個々人毎に変容され，さらにそれらが想起される際には後日の情報などの影響を受ける（Neisser 1982＝1988）。つまり，私たちの過去の記憶とは，小型ビデオカメラで録画された，その当時の正確な記録映像なのでは決してない。さらに，その記録映像が何度も繰り返し，同じように再生されるわけでもない。

ならば，冒頭で紹介した西田の「記憶」は，現在の西田の置かれている環境と西田本人の意図によって再構成されたものであるとも言えよう。つまり，端的に言えば，「加工された記憶」ということになろう。

まず，そのことをしっかりと確認した上で，再び西田の「回想」に立ち戻ろう。筆者（宮内）は，この記述に素朴に違和感を覚える。個人の世界観の相違なのだろうか，筆者は不思議にも感じた。恐らく同級生であろう「ツッパリ」男子生徒に羽交い締めにされて殴られそうになったというのに，なぜ「『殴られて当然』と自分でも思」ったのであろうか。さらに，「殴ろうとしていた彼らのことが『気にかかる』，『わかりたい』とも感じていた」のだろうか。なぜ殴られそうになった時に，恐怖やおののきを感じなかったのだろうか。

筆者の疑問は以上に尽きる。当該書の著者の西田は，1960年に広島県福山市に生まれている。西田が中学生であった頃の日本国内の大半の中学校は，地域差はあろうが，荒れ始めていた頃ではなかったか。その6年後に大阪府で生まれた筆者（宮内）が中学生時代には「校内暴力」全盛期であり，筆者が通学していた地元の中学校では，定番の「不良」を主人公とした学園ドラマを通り越した日常が繰り広げられていた[2]。例えば，登校後すぐに男子生徒のうちの誰かが殴られ，1時限目には鼻血を出しながら授業を受けていた。男子生徒においては拳で顔や腹を殴られるという行為を実際に体験したり，目の当たりにすることが珍しいことではまったくなかった。そういう行為などはまだ生易しかったと言える（あえてここには記さないが）。そういう中学生時代を送ってきた筆者からは，「『殴られて当然』と自分でも思」うことなど一切ないし，「殴ろうとしていた彼らのことが『気にかかる』，『わかりたい』とも感じ」ることもない。地元の中学校においては，同級生である「リーゼントスタイルの『ツッパリ』男子生徒」（筆者の通学していた中学校では，生徒指導の体育教師にバリカンで無理矢理に頭髪を刈られて丸刈りであることが多かったが[3]）である彼らをわかりたいと思わなくても，彼らの親の職業や家族構成，彼らの好きな音楽に好きなバイク（運転免許は年齢が至らないのでまだ法律的に取得できないはずだが），そして彼らの苛立ちなどを筆者は知っていた。少なくとも「わかりたい」と感じなくても，そのような情報はすでに届いていた。本稿が対象とする『排除する社会・排除に抗する学校』の1章で描かれている「文化住宅」が集中している地域社会で生活していくということは，そういうことも含まれるのであろう。

西田による冒頭の回想をわずか6行だけ読むだけでも，筆者はいくつもの不思議さを感じる。単なる個人的な感覚の問題だけに矮小化できない問題も含まれているだろう。

まず，西田の「表層的理解」の問題が指摘できる。「リーゼントスタイルの『ツッパリ』男子生徒」を文字通りに「気にかかる」そして「わかりたい」と感じたのならば，彼らのことを西田は殴られそうになる以前はまったく「気にしていない」存在であり，まったく理解しようともしていなかったということになってしまうのではないだろうか。筆者自身の体験を先に少し述べたが，地元の公立中学校に当時通学していたならば，そういうお互いが“遮断された関係”になることは難しかったのではないだろうか。まるで，21世紀の映画『桐島，部活やめるってよ』（吉田大八監督，2012年）で描かれたような，グループ以外の人間には興味がない「島宇宙」の

ような場景である。1960年代に生まれた私たちが中学校生活を過ごした1970年代に，そのような関係性が可能であったのかどうか。一人に一つのスマートフォンなどとは程遠い，一家に一台のダイヤル式黒電話すらも設置されていたとは言い難い状況で，西田のような感慨を抱くことが筆者にはまず不思議でならないのである。他者の情報をあえて遮断し，表面的な関係にあえてとどまるような態度を意図して保持し続けていないと，難しいように筆者には思える。

さらに，上記で述べたように，なぜ殴られそうになった際に恐怖を感じなかったのだろうか。あのような“慈悲的な態度”とも呼べる態度を中学3年生がどこで身につけたのだろうか。疑問は尽きない。殴られそうになった場合には，まずは殴られないように逃げようとするだろうし，恐怖の中，殺されないようにもがくのではないだろうか。私たちは日常生活上においては，高みの見物では決していられない。誰もが，この世を生き抜くために，生活し続けるために，もがき続けているのではないか。私たち「〈生活―文脈〉理解研究会」による前稿「新たな貧困調査研究の構想のために」（宮内ほか 2014a）では，「貧困調査における調査者自身の実感とリフレキシビティ（reflexivity）」の重要性を提唱した。この点と，西田の冒頭の回想は深くかかわる問題だと筆者たちは認識している。

とは言え，西田による冒頭の回想は，西田が中学3年生の出来事である。ここで述べた指摘が，中学校3年時から35年近くも経て出版された西田による著書すべてに果たしてかかわってくるのだろうか。これについては，私たち〈生活―文脈〉理解研究会のメンバーによる以降の各節の分析をご覧いただきたい。

ここで改めて，本稿で分析対象とする著書について説明しておく。本稿では，西田芳正による初の単著書である『排除する社会・排除に抗する学校』を中心としながら論考を展開している。当該書の構成は以下の通りである。

はじめに
序章　格差・貧困の拡大と社会的排除
１章　都市流入者の地域形成と大人への移行過程
２章　大人になる―下町の中学生の学校生活と進路選択―
３章　貧困・生活不安定層における大人への移行過程
４章　「自然な移り行き」と「投資・配慮と努力」
５章　社会の底が抜ける―住居喪失経験者の語りから―
６章　排除する学校・教師
７章　児童養護施設と学校教育
８章　排除に抗する学校・教師
おわりに

この著書を，前稿「貧困調査のクリティーク（1）―『豊かさの底辺に生きる』再考―」と同じく，〈生活－文脈〉理解研究会のメンバー全員が分析を試みた。

具体的に述べると，第1節では石岡丈昇によって，西田芳正の当該書の視角そのものの問題点が喝破される。石岡が「万能型フレーム」と呼ぶ，西田による研究の看過できない根本的問題であろう。第2節では筆者（宮内）が，西田の社会調査・フィールドワーク，そしてそれに基づく分析の問題点を指摘する。第3節では打越正行が，当該書で描かれた若い女性の再分析を

おこない，西田とは異なる解釈を提起する。第4節では新藤慶によって，当該書における学校に関する知見が整理されるとともに，西田自身の態度の背景が示唆される。第5節では松宮朝が，地域研究の視点から，当該書における分析枠組の根本的な問題を指摘する。(宮内)

1.「万能型フレーム」と「他者の非合理性」

1.1　論敵としての学歴社会論・競争社会論

『排除する社会・排除に抗する学校』は，既存の学歴社会論・競争社会論を論敵に書かれている。

> 学歴社会論の多くは発表媒体が一般読者を想定したものだったと菊池城司は指摘している。マスコミは「学歴問題なら売れる」と確信し，実際に広範な読者を獲得した。焦点は学歴→社会的地位に置かれたが，それは一般の日本人の学歴に関する関心が研究関心に投影されたものだった(菊池 1992)。それでは，ここで言う「一般の日本人」とはいかなる層を指すのだろうか。･･･ 学歴競争において不利な条件に置かれている人々，あるいは競争に関心や熱意を持たない人々の存在が省みられないままとされてきた(pp.133-4)

> 「すべての国民の潜在的能力の全面的開花をはかり，その意味で子どもの成長と学習の権利を完全かつ均等に保障」(小林 1972：42-6) すべきだという現状批判は，それ自体は正当な主張であるにせよ，階層差を問題視する姿勢を弱めるという結果をもたらしているのである。「あるべき教育」という当為論的な教育観を共有するが故に，教育運動も教育研究者も，現実に存在する階層差を解明すべき課題と見なす姿勢を後退させてしまった(p.135)

西田は，学歴社会論も競争社会論も，共に階層差を捉えてこなかったと指摘する。学歴社会論については，マスコミとの共犯の下で「売れる」ための言説生産に関与してきた点が批判される。「学歴社会論には，マスコミを媒介とし，双方ともに学歴に切実な利害関心を持つという背後仮説を共有する生産者と消費者が作り上げた社会問題という側面がある」(p.134)。ここで消費者とは「向学心はあっても高等教育の進学を断念せざるを得なかったルサンチマンを抱く人々」および「子どもに学歴をつけさせることで地位の維持・向上を切望するホワイトカラー」であり，生産者とは研究者のことである。研究者―マスコミ―ホワイトカラーの消費者という三つ巴の関係で「作り上げられた」のが学歴社会論であると指摘する。言い換えるなら，教育関係者が学歴社会を対象化するのではなく，学歴社会論という臆見の再生産に手を貸してきたと指摘しているのである。このでっち上げの社会問題である学歴社会論においては，階層的に不利な位置にある人々が議論の射程外に置かれていたことが述べられる。

競争社会論もまた，階層差を捉えてこなかったと指摘される。「政府・財界が進める『能力主義教育』に対抗して日教組が主導した，『能力主義教育』＝『差別選別教育』という見方が教育界に定着した経緯を分析した苅谷剛彦は，その重要な帰結として，教育における階層問題，学歴取得以前の不平等が不問にされたことを指摘している」(p.134)。西田は，そこからこう議

論を展開する。「教育運動のこうした見方とパラレルな傾向を，教育研究者にも見て取れる」（p.134）。「子どもの成長と学習の権利」について主張する「当為的教育論」は，階層差について「問題の棚上げ」（p.134）をしているにすぎないのである。

『排除する社会・排除に抗する学校』は，このように当為的教育運動の担い手や，学歴社会論という臆見の再生産に寄与してきた教育社会学者に対する批判が展開された書物である。かれらは階層差を不問にしているからである。西田はこうした現状に批判的に介入するために，被差別部落，児童養護施設，都市底辺地域に関する実証的データを用いた。そこから「貧困・生活不安定層」という概念を用いて，その社会層の子どもから大人への移行過程を解明しようとするのである。本書が用いたデータは1980年代後半から得られたものであるが，そこには次の目論みがあった。その時代は「『学歴社会』『競争社会』の問題性が盛んに論じられていた時代でもある。今日優勢な議論を相対化するうえでも，この時期に行った調査の知見は有益なものと考えている」（p.6）。

では，学歴社会論や競争社会論が不可視化してきた階層差を明瞭化するという西田は，本書でいったいどのような見識を提示したのか。

1．2　属性を打ち破る貧困問題

西田は本書が対象とする社会層を「貧困・生活不安定層」と定義している。

> 貧困層に限定せず，「貧困線」をはさんで隣接する層，経済的な困難さでみれば貧困層と比して軽度ではあるが，さまざまな形で不安定さ，困難さを抱える人々までも含んで対象とする。数のうえでは貧困層を上回る規模のこの層を「生活不安定層」と呼ぶこととし，本書の対象を「貧困・生活不安定層」という言葉で表すことにしよう（p.6）

本書は，このように貧困線をはさんで隣接する層にまで対象を広げて調査をおこない，そこに「社会的排除」の視点を挿入して考察を展開している。「社会的排除」という視点を入れることのねらいは「経済的，物質的な困窮だけではなく，さまざまな形で不利，困難な状況に置かれた人々を『排除』状況にあるものとして対象とすることができる」（p.5）。この対象構成の仕方は，近年の貧困研究ではおなじみのものであり，西田もそれに従うのである。

ところで本書は，これまで西田が学術雑誌や書籍に寄稿してきた論考群をベースにまとめられたものである。例えば第3章「貧困・生活不安定層における大人への移行過程」は部落解放・人権研究所編『排除される若者たち』の掲載論文が初出である。また第6章「排除する学校・教師」は八木正編『被差別世界と社会学』に寄せた論文が初出である。ここでポイントになるのが，被差別部落に関わる文脈で書かれた論考を，果たして貧困という文脈に鞍替えして再定置することが可能かという論点である。差別問題を貧困問題に回収するという，学術的にも社会運動的にも多くの議論を引き寄せる点に関して，西田は次のように記している。

> 部落で生まれ育った対象者からは，交際相手の親から部落出身であることを理由に結婚を反対されるなど，部落差別に関連する経験が語られたケースもあるが，本論で言及するさまざまな経験は，部落差別に直接関連するものではない。彼／彼女たちが交友関係をもつ部落外の若者にも，そして高校の教師から紹介された対象者にも，共通して見られる生活背景や経

験であった（p.74）

「本論で言及するさまざまな経験は，部落差別に直接関連するものではない」。それは部落外の若者にも該当する共通の経験であると指摘されるのである。部落の経験を消し去り，貧困問題として包摂する本書第3章の冒頭に記されたこの但し書きを，私たちはどう解釈できるだろうか。

筆者（石岡）は，本書が研究対象を「貧困・生活不安定層」と規定したことの含意について，上記の引用箇所を注視することで解釈できるのではないかと考えている。すなわち，被差別部落の調査をベースにしながらも，「本論で言及するさまざまな経験は，部落差別に直接関連するものではない」と但し書きをつけるとき，そこには社会学の伝統的な研究対象としての貧困問題が呼び戻されているように思えるのである。

様々な議論を呼び起こすであろう上記の引用箇所について，筆者はそこに今日の被差別部落の流動的状況を見て取るというよりも，むしろ貧困とは何かという認識を再考する契機があるように読んだ。今日，マスコミ報道を通じて，様々な貧困の模様が伝えられている。「女性の貧困」，「アイヌの貧困」などである。しかし近代社会が「貧困」という言葉を必要としたのは，こうした属性に内在する貧しさの状況を説明するためではなく，むしろそうした属性を横断して，より的確には属性を打ち破って，「誰しもを」貧しさに陥れる，そうした資本の運動の必然的結果を認識するためではなかったか。中川清の議論を引いておこう。

> 都市下層がなお有していた他の諸階層との共通性はほぼ完全に失われる，と同時に，「下層社会」として他と区別されていた異質性もしくは固有性も失われ始め，一般的な基準にもとづく比較によって都市下層を位置づけることが可能になってきた（中川 1985：2）。

中川が念頭においているのは，可視化されていた「細民地区」などが都市空間から放逐され，かわりに行政は要保護世帯として政策的レベルで把握することになる事態である。近代の「貧困問題」は，各人の属性に内在する貧しさのレベルではなく，それらを横断して把握可能な社会経済的指数に基づく「貧困層」に焦点化したものである。

本書において西田が被差別部落調査も含めて，それらを「貧困・生活不安定層」をめぐる問題として捉えた点も，これに関わると思われる。西田は属性に備わった貧しさのレベルから，そうした属性間を横断して，あるいはそうした属性の壁そのものを打ち破るほど強烈な貧困の位相に議論を焦点化していると読めるのである。社会学において「階層」という概念が問題になるのは，社会経済的条件によって属性横断的に一括把握が可能な社会層が近代に誕生したことと深く関係している。どのような属性にあろうと，共通に直面する困窮化の恐怖こそが近代の貧困問題の核心である。それは「『安定した生活に至る途』からの脱落」（p.265）の恐怖でもある。部落調査から部落という特性を消し去り「貧困・生活不安定層」をめぐる問題として置き換える西田の議論は，次の一文にも象徴されている。「排除のリスクは今やすべての子どもたち，若者たちが直面しているということも事実である」（p.265）。「すべての子ども」をめぐる議論へと昇華されるのである。

1．3　「万能型フレーム」への回収と「他者の非合理性」の抽出

このように本書は，部落から文化住宅（第1章）やワーキングプア（第5章），さらには児童養護施設（第7章）までをも対象に組み込んで，それらを「貧困・生活不安定層」として一括把握する試みである。では，こうした多様な属性の対象を一括把握することによって，いかなる見識が得られただろうか。本書の結論部に当たる第8章からその点を確認しておきたい。

8章の末部において，西田は「排除型社会」を作り替える力として，大阪府立西成高等学校の「反貧困学習」を取り上げている。それはパウロ・フレイレの言う「意識化」をベースとして，「格差の連鎖を絶つ」ために生徒自らが認識を獲得していく学習である。「孤立し無力なままに置かれ，困難な生活を強いる社会のあり方については認識できずにいる」（p.265）人びとに，貧困を生み出す社会について認識することを目指す学習である。そこに西田は，「排除に抗する学校」のありようを探ろうとする。

貧困の渦中にある生徒が「自己責任」ではなく，それを生み出す社会について認識することで，貧困を生み出さない新たな社会を創造する担い手になる。本書の末部に記されたこうした内容を読みながら，筆者はそこに見て取れる過度な一般化の論法が頭から離れなかった。西田は実証的データを読み解き，さらに属性内在的な貧しさの位相から属性を横断する「貧困・生活不安定層」の位相へと議論を再定置してきた。しかし，こうした作業を経て得られた結論が，「困難な生活を強いる社会のあり方」を認識しそれに働きかける主体を形成すると言うのでは，これまでの具体的記述は一体何であったのかと問いかけたくなってしまう。

ここに本書の第一の特徴を指摘できるだろう。本書には，具体的調査をしたからわかったことが何であるかが結論として提示されていない。かわりに，「反貧困学習」という非常に一般化された内容で結ばれるのである。調査から見識を得るのではなく，それとはかけ離れた過度の一般的見解を記して結論とするスタイルは，本書の各章にも見て取れる。

> 学校の中で，そして早期に学校を離れる彼／彼女たちのキャリアを考えれば，学校外でどのような経験と場を提供できるかが大きな課題となるだろう（p.111，第3章の結論部）

> いくつかの事例から浮かび上がるのは，実際に深刻な困難と問題を抱えた子どもたち，親たちの存在が視野に入れられないままに教育問題が議論され，対策が打たれ，排除された層はそのままに放置されるか，さらなる困難を強いられるという事態である（p.137，第4章の結論部）

これらの結論を出すのであれば，具体的調査は不要だろう。西田は調査からわかったことを敷衍するのではなく，貧困問題一般に該当する見解を述べて，各調査の結論とするのである。言い換えれば，具体的調査の内容がどうであっても該当する「万能型フレーム」とでも呼べるものに依拠することで，論考を締め続けているのである。ここで「万能型フレーム」とは，調査をもとに得られた見識を提示するのではなく調査をしなくとも主張可能な一般的見解を添えて調査論文の結論に換える，そうした議論構成枠組みのことである。この「万能型フレーム」に依拠する以上，具体的調査はあまり重要なものではなくなる。なぜなら，どのような調査であろうと当てはまる結論しか出されないため，調査やその方法が深められることがないからである。

「万能型フレーム」に依拠した西田の研究は,「他者の非合理性」の描出という本書の第二の特徴を生み出している。具体的には，たとえば第3章の以下のような記述にそれがうかがえる。

> その過程（前段落の「困難で不安定な大人の生活への自然な移り行き」のこと:引用者）が自然なものとして経験されるのは，見知った世界とは違う世界についてのイメージが抱かれず，他の選択肢が提示されていないなかでの移り行きだからであろう。おそらく，1章で描いた，意識された空間，行動する空間の狭さと重なる特徴である（p.104）

> 彼／彼女たちを取り巻く社会関係については,「サラリーマンとは出会ったことがない」という経験が手がかりになる。その背景には，生まれ育った地域の職業的多様性が低く，ホワイトカラー従事者が少なかったという状況があるはずである。…「早く結婚しよう」と語る女子高の友人は，似た者同士の仲間集団であったのだろう（p.104）

> 対象者本人が付き合う相手も，先にみた姉や妹など近親者と交際し結婚する相手も鳶，大工，解体工など現場系労働者が多く,「サラリーマンとは付き合ったことがない」という経験も含めて，生まれ育つ地域と交友関係の階層的同質性を印象付けるものである（p.105）

> さらに注目すべきは，ホワイトカラーの仕事に対して「ペコペコして」男らしくない，リストラされて不安定，といったネガティブな評価が，現場系労働者の像との対比でなされている点である。…「閉じられた世界」のなかで，テレビなどからの間接情報を通して見る外の世界について「誤解」することで，現状が受容されていると解釈できるのではないだろうか（p.105）

「困難で不安定な大人への移り行き」は，調査対象となった人びとが「閉じられた世界」に生きているから起こるのだと主張するのである。この点は本書で幾度も繰り返され，たとえば別の第4章でも「『狭い世間』，つまり意識され行動する空間の狭さと周囲のモデルの同質性などの制約要因が，高い達成をあらかじめ阻むかたちではたらいている」（p.122）と主張する。要は，調査対象の人びとが非合理的だから，かれらは困難と不安定に陥っていると，西田は主張しているわけである。

社会学には様々な事例研究が存在するが，通常それらにはふたつの記述様式が見て取れることが多い。ひとつは「自己の非合理性」を描出するものである。これは「常識を疑う」といったフレーズで語られる記述様式である。調査者にとって当たり前に思えていたことが，実は当たり前ではないことを直視し，そこから認識を鍛えていく営みである。調査者は，合理的に思えた自らが，実は限定的で特殊な物事の捉え方しかしていないことを調査の過程で発見しなおし,「自己の非合理性」を自覚する。そして，この「自己の非合理性」を自覚する中から，対象を記述しなおすことで，新たな物事の捉え方を提示するというものである。この「常識を疑う」作法は，数多くの社会学のテキストでも記されているものであり，なじみ深いものであるだろう。

もうひとつは「他者の合理性」を描出するものである。これは，非合理に見える他者の行為が，実は合理的論理に基づいておこなわれていることを記述するものである。たとえば，アー

ヴィング・ゴフマンは，全制的施設において逸脱的と一般に解釈される行為が，実際には当事者の合理的論理に基づいている点を提示している（Goffman 1961＝1984）。「どんな人びとの集団であっても―それが囚人であれ，未開人であれ，飛行士であれ，患者であれ―，それに接近してみたならば，そこには有意味で道理的で正常な独自の生活が営まれていることを知るだろう」（同上：ii）。調査者は「他者の合理性」を自覚する中から，新たな物事の捉え方を提示するのである[4]。

もちろん，社会調査に基づく研究は，その内容に即して結論を導出することが重要なのであって，「自己の非合理性」や「他者の合理性」を抽出すること自体が目的なのではない。だが，結果的に，「自己の非合理性」や「他者の合理性」を発見していくことが多く見られる点に社会学の特徴はあり，それは記述の「遠近法」とも呼ばれてきた（Bourdieu & Wacquant 1992＝2007）。そうすることで物事の捉え方を変革しようとしてきたのである[5]。

だが，西田の記述は，これらの記述様式とは異なり，「他者の非合理性」を描出していると思われる。西田が研究対象とする若者たちの行動について「狭い世間」と呼ぶとき，その記述は「自己の非合理性」とも「他者の合理性」とも異なる，「他者の非合理性」の抽出となっている。「他者の非合理性」の論理を支える前提は，調査者の合理性と対象者の非合理性である。合理的な「私」が非合理的な「かれら」を書くというスタイルが，本書を貫く記述様式であるだろう。

> 大学生の多くは，中学，高校の年齢では「遊び」への誘惑に抗いながら，勉強の世界に留まり続けたはずである。／勉強しなかったら，遊んでしまったら「たいへんなことになる」，「失うものがとても大きい」という思いが強くはたらいているのだろう。そういった「リスク感覚」と呼ばれるものが不在であるが故に，一方の調査対象者の若者たちは学校・勉強から離れ，「遊び」の世界に没入していったものと解釈できる（p.87）

調査対象の人びとは，西田の言う「リスク感覚」が不在で，だから大学生とは違って勉強をせずに「遊び」に没頭している。こう指摘する箇所などは，まさに合理的な西田と非合理的な調査対象の人びとという図式が，投影された結果であると言えよう。

本書の冒頭で，西田はこう記している。

> 子ども，若者の置かれた困難とその軽減をテーマとするならば，最も困難な層にも目が向けられなければならない。言い換えれば，誰が，いかなる困難に直面しているのか，それはどのようなプロセスで経験されるのかを，子ども，若者の置かれた社会的状況の多様性に即して丹念に捉えることが求められる（p.4）

だが「万能型フレーム」に依拠して「他者の非合理性」を記述することは，「若者の置かれた多様性に即して丹念に捉える」点には反している。「多様性に即して丹念に捉える」ためには，過度な一般的見解による結論づけを抑制するだろうし，それぞれの生活上の文脈における若者の行為の合理性の把握が要求されるからである。ではなぜ西田はこのような「万能型フレーム」と「他者の非合理性」記述に依拠しなければならなかったのだろうか。次節以降では，西田の調査手法およびそこからの議論形成についての問題に踏み込んでいく。（石岡）

２．貧困調査における〈文脈〉

２．１　西田芳正による社会調査・フィールドワーク

本節では，本稿が対象とする西田芳正による『排除する社会・排除に抗する学校』における調査方法に焦点を絞って考察する。

私たちの前稿「貧困調査のクリティーク（1）」は，久冨善之グループによる『豊かさの底辺に生きる』を対象にした。『豊かさの底辺に生きる』においては，久冨グループによる，ある北日本の公営団地における社会調査の結果に基づいて，著書一冊が執筆されていた。対照的に，本稿が対象とする『排除する社会・排除に抗する学校』は，西田芳正一人による著書ではあるが，多岐にわたる調査から一冊が編まれている。すなわち，いくつもの社会調査・フィールドワークの結果に基づいている。ただし，地域については西日本に限定されていると言えるかもしれない。具体的に1章ずつ見ていく。

まず，1章「都市流入者の地域形成と大人への移行過程」は，「1995年3月に，当地のアパートを借りて1ヶ月間滞在し，当時20歳過ぎの若者を中心に生活史インタビューを行ったほか，学校，役所，警察，保健，社会教育などの関係者に聞き取り調査を行った」結果によるものである（p.11）。その成果は，谷富夫編著による『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』（1996年）の一つの章である「文化住宅街の青春―低階層集住地域における教育・地位達成」としてすでに公表されている[6]。この「生活史インタビュー」は西田本人が一人でおこなったものではなく，大阪大学人間科学部で卒業論文を作成したAさん自身もインタビューをおこなっており，それらの結果が混在している。

次に，2章「大人になる―下町の中学生の学校生活と進路選択―」は，中学生の「卒業式を目前に控えた時期に，3年生全員が自分自身の『答辞』として，印象に残った出来事，自分の成長の足跡を記録した」文章を分析している。ちなみに，147名分の文章である。

続いて，3章「貧困・生活不安定層における大人への移行過程」は，40名の若者に対する「生活史インタビュー」を実施した結果に基づいている。具体的には，「厳しい生活背景の生徒が多く通う高校の教師から卒業生を16人，大阪府内数か所の被差別部落で若年者を対象とする就労支援事業を行っているスタッフから，困難な状況にある若者 24人を調査対象者として紹介いただいた」ということである（p.74）。この調査は，「部落解放・人権研究所の調査プロジェクトとして，西田のほか，内田龍史，妻木進吾を主メンバーとして実施」され，その成果は部落解放・人権研究所編『排除される若者たち－フリーターと不平等の再生産』（2005 年，解放出版社）としてすでに公表されている。具体的には，「調査時期は2003年4～10月，高校や，地域の就労支援事業を行っている施設の一室などで」実施され，「1人当たり1～3時間程度のインタビューで，生まれ育った家庭での生活，学校経験，友人との余暇時間，就業の経緯を自由に語ってもらい，『親からの期待』や『将来展望』など，あらかじめ調査者側で用意した項目について，語りの中で言及してもらうよう適宜質問を差し挟むという形式で行った」ということである（p.112）。

続いて，7章「児童養護施設と学校教育」は，「2005年から3年の間に12人の施設経験者に直接出会い，生活史を聞き取った調査」に基づいている。具体的には，「12人には，施設経験者の支援活動に参加している人，施設の職員，施設の子どもたちを支える取り組みを重ねている中学校の教師からの紹介を得て出会うことができ」，「実際の聞き取りは，1時間半から3時間ほ

どの間，生育家族，施設と学校での経験，施設を離れてからの生活について自由に語ってもらい，こちらがあらかじめ用意していた質問項目を適宜差し挟む形で進めた」とのことである（p.224）。

最後に，8章「排除に抗する学校・教師」においては，「学校として施設の子どもたちを支えている学校」（当該書では「Z中」と表記）の教員の語りが記述されているが，直接的に，いつ，どこで，誰が何について語り，誰がどのように話をうかがったのか，そしてどのように記録したのかについては本書においては記載されていない。

他の章は，直接的に西田本人が聞き取った調査結果ではない，種々の調査結果をもとに記述されている。ただし，6章「排除する学校・教師」においては，一部のみ，西田本人による「フィールドワーク」で得られた「教師の言葉」が含まれているが，それがいつの時期かは不明である。

また，エッセイは6つあり，そのうちのエッセイ2，同5，同6の3つが，まさに西田芳正自身のフィールドワークとも言える体験に直接基づいて描かれている。

2．2　「文字情報のかたまり」

前項から，当該書における社会調査・フィールドワークの具体的方法は，実施時期については多岐にわたるが，主に関西地区を中心とした地域における「生活史インタビュー」[7]であると言えよう。しかも，ランダムサンプリングや多段抽出法ではなく，教員や施設職員，NPO関係者に紹介していただいた人たちが被調査者になっている。いわゆる「つて」による，（調査者の自由度が少ないかもしれない）「半構造化インタビュー」であると客観的に説明できるかもしれない。

西田芳正による実証研究は，上記のような「生活史インタビュー」の聞き取り調査結果で得られた知見のみにとどまらない。見過ごしてはならない点は，1章において「1995年3月に，当地のアパートを借りて1ヶ月間滞在し」たと記述されているように，フィールドワークも同時におこなわれている点である。西田のフィールドワークの一つの成果を引用しておこう。

> 学校の教師から，『道が迷路のようで，転任したての教師が家庭訪問で何度も迷子になる』というエピソードを聞いていたが，まさにその通り。数分歩いただけで方向感覚がなくなる。道幅は狭く，まっすぐに続く道路や直行した交差点がない。田んぼを更地にして無秩序に文化住宅を建て，できた建物の間が道になったのだと不動産屋で聞いた，開発当時の話が実感される。老朽化した文化住宅も多く，2階に上がる階段の片方が壊れたままのものも。自治会の掲示板には「阪神大震災の義援金，45万円集まりました」というビラが貼られている。また，袋小路になった道路の入り口に「子ども広場」とペンキで書かれた障害物が置かれている場所もあった。子どもの遊び場を確保しようとする住民の願いの表れだろう。日曜日の昼間，道路に面して洗濯物が並べられ，生活臭があふれている。玄関先のスペースで植物を育てている家も多い。玄関や壁に公明党や共産党のポスターが貼られているのが目立つ。文化住宅の1階部分で商売をしているケースも珍しくない。スナック，カラオケ喫茶，赤提灯，建設会社もある。沖縄料理屋や韓国の物産を扱う店もあった。銭湯も健在で，徒歩圏内に数軒，深夜まで営業している。（p.10）

以上は，西田が「1995年3月に『文化住宅』が集中している地域に1ヶ月間部屋を借りて，調査を行った際記したノートの一節」である。本人も記しているように，出版されたエスノグラフィーの一部などではなく，単なる「ノートの一節」ということであるが，細かい部分までよく観察されていることがうかがえる。この短い文章の中に，不動産屋での聞き取り調査で得られた知見までもが組み込まれ，この地域の各店舗も自らが歩いて調べた結果が活かされていると思われる[8]。

この他にも，「エッセイ6」における，ある中学校の職員室の記述も，上記と同様にノートの一節ではあるが，わずか5分間の描写とは言え，職員室の慌ただしさが描かれているように思える。さらに，「エッセイ5」においては，イギリスの旅行における西田自身の実感が余すところなくふんだんに散りばめられている。

このように，「対象者」の生活に密着し，西田自身の実感が捨象されずに，被調査者と調査者の生活に基づく視点が当該書すべてに通底しているのかと言えば，そうではない。

例えば，2章では，中学生たちの文章を分析しているが，この中学生の作文の分析が「それ以来現在まで継続してきたインタビュー調査，観察調査で得られたテキストデータを扱う最初の経験」であったと率直に告白している（p.69）。その上で，「エッセイ1」においては，「テキストデータとの格闘」と題して，この作文の分析の「トライ・アンド・エラー」を記している。簡潔に述べると，「詳細な要約の作成とカード化」という「脱文脈化」，そして，そのカードのテーマ毎の呼び出しと並べ替えという「再文脈化」に至る，西田による試行錯誤と言えるだろう。そして，当該書の3章以降はこの手続きによって分析されていることが私たちに告げられる。

筆者は疑問に思う。自身によるフィールドワークでせっかく得られた，生活の手触りを感じさせる実感を，西田自らが手放しているように感じられるからだ。だが，それは仕方がないことなのかもしれない。この「エッセイ1」の中には，西田の研究に対する根本的視座が刻まれている。引用しよう。

> インタビューをテープ起こしした原稿（トランスクリプト）もフィールドノートも，実際に分析の対象とするのは「作文」と同じ文字情報のかたまりである。(p.69)

つまり，フィールドワークにおいて視角・聴覚・嗅覚・味覚・触覚などで感じられた実感や，「インタビュー」時に感じた感情などよりも，西田において重要なのは，〈いま－ここ〉ではない，現場（フィールド）からは遠く離れた研究室に所蔵される「文字情報のかたまり」なのではないだろうか。だから，自らの身体を伴った社会調査・フィールドワークから，生々しい現実をつかみながらも，それを切り刻んでいくのだろう[9]。

2．3　〈現場〉にいた/いることの意味

一方で，同じ西田は初学者向けの社会調査のハンドブックにおいては，「文脈の中で捉える」ことの重要性を述べている。引用しよう。

> しかし，インタビューや日常場面の単独の語りだけを素材とすることは危うさをはらんでいることに留意しなければならない。違う立場の人間にとっては同じ出来事が別様に経験され，別様に語られることだろう。また，同じ人物であっても，場面や相手が異なれば，やは

り別の語りとなるだろう。それでは切りがないではないかと受け止められるかもしれないが，そんなことはない。現地で長い期間生活を共にする，何度も現地を訪れる調査であることのメリットがここにある。多様な場面で，多様な人びとによって語られる内容を，その文脈に即して聞き取ることが可能なのであり，さまざまな声を重ね合わせることで，対象者の世界を捉えることができる。（西田 2010：138）

同じく2010年初頭に刊行された日本質的心理学会の新たな学会誌において，筆者もまた同様な主旨の論考を発表した。日本社会学史においてはエポックメイキングな作品の一つであり，西田が中心とする「生活史インタビュー」の原点とも言える中野卓による『口述の生活史―或る女の愛と呪いの日本近代』を取り上げ，社会調査における語りの扱いの相違について筆者は論じた[10]。あまりにも常識過ぎて，文字にするのも憚られるが，「生活史」研究においては，当事者の生活の文脈重視は当然のことである。にもかかわらず，「生活史インタビュー」をその調査方法の中心に据える西田芳正がなぜ上記のような「脱文脈化」を主張するのだろうか。筆者には不思議でならない。上記のハンドブックからの引用箇所は，編者からの要請に応えただけであって，西田本人の主張として受け止めてはならない種の記述なのかもしれない。

筆者はかつて別の場で以下のような危惧を唱えた。その思いはいまも変わることがない。

これまでになされてきた質的研究の本質的な部分（前述の通り，それは実証的な社会学領域の伝統的な蓄積と重なるだろう）が削ぎ落とされ，まさに「ハウ・トゥー」や「ノウハウ」といった部分に特化した，とてもシンプルな方法の図式的説明が支持されていくように感じられた。このことに私は危機感を覚えたのだ。さらには，このような一部の入門書やテキストをもとにして，質的研究で得られた「データ」がまるでジグソー・パズルのピースのように取り扱われ，その場（フィールド）やその「対象者」自身の文脈を無視して，まったく異なる，さらには研究者に都合が良く，耳触りの良い「物語」として安易に《加工》され，次々に発表されていく様（当然のことながら，あくまでも一部だが）にはかなりの違和感，さらには憤りを感じていた。（宮内 2010b：iv頁）

同じ論考の中でリフレクティヴに述べ直しているように，上記は「質的研究の大きなうねりに乗じて生産されていた安易な《加工》作業に対する危機感」を抱いた筆者の「きわめて私的な感情の吐露」である（宮内 2010b：vi頁）。

以前の筆者らの論文（宮内ほか 2014a）において，貧困調査における調査者のリフレキシビティ（reflexivity）の重要性を論じた。「貧困・生活不安定層」を調査対象にした西田による当該書における社会調査から分析へのプロセスは，筆者らの主張とは対極に位置するように感じられる。まるで自らの生活やそこから生み出される実感とはあえて向き合わないようにしているかのようでもある。

筆者は，本稿の「はじめに」において，西田の「回想」を引用したが，この「回想」と，当該書1章の冒頭の「ノートの一節」に，同質の型を感じる。要所要所でこのような〈現場〉にいた証としての記述を挟み込みながら，社会調査・フィールドワーク時に感じた実感等のリフレクションを分析時に捨て去り，カード化の行為に伴う「脱文脈化」に専念する。西田が長い研究人生の中で対象としてきた人たちは，現代社会において困難な生活を強いられてきた人たちではな

かったのか。にもかかわらず，その人たちの固有の生活に根差す〈文脈〉から行為や語りを引き剥がす「脱文脈化」を進める積極的意義は一体何があると言うのだろうか。西田本人が述べるように，「多様な場面で，多様な人びとによって語られる内容を，その文脈に即して聞き取ることが可能なのであり，さまざまな声を重ね合わせることで，対象者の世界を捉えることができる」のであるならば，目の前にいる人たちの生活に即した〈文脈〉の理解の深化と，研究成果においてはその〈文脈〉の説明が必要となるのではないだろうか。

「貧困・生活不安定層」に対して社会調査を続ける西田芳正は，「貧困・生活不安定層」の語りをカード化しつつ「脱文脈化」するベクトルに進んだが，西田が「貧困・生活不安定層」とカテゴライズした人たちが生活する〈文脈〉をより深く理解するように努め，その〈文脈〉の中で各個人の語りを改めて理解し，分析していくという方向があったのではないだろうか[11]。(宮内)

3．女の子たちはなぜガテン系の男性を好むのか？

3．1　はじめに

本節は，西田芳正による『排除する社会・排除に抗する学校』を生活不安定層の若者文化の視角から再検討することを目的とする。具体的には，生活不安定層の女の子たちが思い描くガテン系の男性との生活について検討を試みる。

西田は彼女たちがガテン系[12]の男性を好むこと，そしてその男性との家族を形成する過程で生活不安定層の「社会的不平等，貧困の世代間再生産が次の世代においても生じる可能性の高さ（妻木 2005：63）」を指摘する（p.100）。ただ，なぜ彼女たちがガテン系の男の子を好むのか，また男性との将来についての見通しはどのようなものなのか，それを支える基盤はどのように構築されるのか，これらを丁寧に読み取るなかで，西田が提示したものとは異なる彼女たちのリアリティに迫りたい。結論を先取りすれば，彼女たちは決して消極的なものとして，結婚相手を選んだり，将来の生活への見通しを持っているのではなく，彼女たちが生まれ育った家族や同世代の女の子つながりの価値規範に基づいて「積極的」に選んでいる。ウィリスが『ハマータウンの野郎ども』で提示した反学校文化による再生産のメカニズムを抽出したように，結果としては生活不安定な家族を再生産するとしても，その過程には彼女たちの積極的な意味世界が横たわっている。それを提示することで，貧困・生活不安定層をターゲットとする調査・研究の課題を明確にすることが本節の課題である[13]。

3．2　「学習離れ」，「偏狭さ」，「誤解」――西田による説明

まずここでは西田の当該書3章で中心的に展開されている生活不安定層の女の子たちの大人への移行過程を確認する。

西田の議論の出発点は，彼自身の大学（大阪府立大学）のゼミ生との比較から始まる。ゼミ生と生活不安定層の女の子たちは，ともに「遊びで夢中」な日々を過ごす。ただしその後の違いについて西田は以下のように述べる。

（ゼミ生は――打越）おそらく，勉強しなかったら，遊んでしまったら「たいへんなことになる」，「失うものがとても大きい」という思いが強くはたらいているのだろう。そういった「リスク感覚」と呼ぶべきものが不在であるが故に，一方の調査対象者の若者たちは学校・勉強から離れ，「遊び」の世界に没入していったものと解釈できる。

……

「遊び」への参入を阻む要因のうち，「リスク感覚」の不在を内面的な要因とすれば，外からの「引き止め」が機能していないという側面も指摘できる。（pp.87-8）

西田は「リスク感覚」の不在と，外からの「引き止め」の機能不全が，ゼミ生と生活不安定層の若者との違いであると指摘する。

そしてその移行過程を「困難で，不安定な大人の生活への自然な移り行き」（p.103），「『閉じられた狭い世間』の中での移行過程」（p.104）と表現し，その機能不全の要因を以下の3点によって説明する。

1つ目は「学習離れ」である。

早期の学習離れとその背景にある家庭生活の不安定性について先に言及した。勉強がおもしろくない，わからないという経験は，学校で勉強することを通して可能になる世界を，自分とは縁遠いものとして捉えさせることになるのだろう。（p.104）

2つ目は「偏狭」による説明である。

彼／彼女たちを取り巻く社会関係については，「サラリーマンとは出会ったことがない」という経験が手がかりになる。その背景には，生まれ育った地域の職業的多様性が低く〔――傍点，打越〕，ホワイトカラー従事者が少なかったという状況があるはずである。（中略）さらに，友人関係は階層的同質性を特徴とすることが知られており，その背景には出会いの構造的制約が大きい。地域を離れても，同じような生活背景をもつ者同士が出会い，交友関係が結ばれていくのである。「早く結婚しよう」と語る女子高の友人は，似た者同士の仲間集団であったのだろう。（p.104）

最後は，「学習離れ」と「偏狭」から導かれる「誤解」である。

〔女性――打越〕対象者本人が付き合う相手も，先にみた姉や妹など近親者と交際し結婚する相手も鳶，大工，解体工など現場系労働者が多く，「サラリーマンとは付き合ったことがない」という経験も含めて，生まれ育つ地域と交友関係の階層的同質性を印象付けるものである。そしてさらに注目すべきは，ホワイトカラーの仕事に対して「ペコペコして」男らしくない，リストラされて不安定，といったネガティブな評価が，現場系労働者の像との対比でなされている点である。ホワイトカラーの仕事には，「ペコペコ」することも「リストラの危険」も現実にあるにせよ，そのような対比は「誤解」と言うべきだろう。「閉じられた世界」のなかで，テレビなどからの間接情報を通して見る外の世界について「誤解」することで，現

状が受容されていると解釈できるのではないだろうか。(p.105)

上の説明をまとめると，まず西田はゼミ生と生活不安定層の若者の「遊びへの誘因」をめぐる態度の違いを分岐点とする。ゼミ生は遊びから抜けていくのに対し，生活不安定層の若者は「リスク感覚の不在」と「引き止め」の機能不全によって抜けきれない。そしてそれらを支えるものが彼・彼女たちの「学習離れ」,「偏狭さ」,「誤解」にあると指摘する[14]。西田はその過程を妻木の引用をひきながら「経済的に困難な状況にある女性が困難な状況にある男性と結婚するのであり，(略) 社会的不平等，貧困の世代間再生産が次の世代においても生じる可能性の高さ(妻木 2005:63)」がこれらの結果から示唆されると結論付ける[15]。

3．3　女の子たちの生きている世界の再定位——西田のデータをもとに

3.2で西田による生活不安定層の女の子の移行過程についてみた。彼女たちの遊びへの向き合い方に注目して，そこから抜け出せない要因として「学習離れ」,「偏狭さ」,「誤解」をあげる。

ただし，広島と沖縄で下層若者のフィールドワークを行ってきた私には，彼・彼女たちがそれらの要因によって，消極的に引き受けざるをえなくなったり，誤った選択を行っているようには到底読めない。彼・彼女たちは制限されてはいるものの，その都度に，了解可能な選択を行っており，その結果として生活不安定層の再生産が可能となっているのではないだろうか。

以下では，この過程について西田の当該書で扱われている生活不安定層の女の子のデータを用いて再解釈を試みる。下記表の8名の女の子について書かれたデータを時系列に沿ったテーマごとにみていこう。

表1　女の子たちのプロフィール

氏名	年齢	学歴	性別	職業	概略
10さん	20	高卒	女性	アルバイト	高卒後,アルバイト。早く結婚し,専業主婦になることを志望しているが,相手が見つからないことにあせりを覚え,憂慮している
17さん	20	高卒	女性	アルバイト	家庭背景が厳しい中,周囲の人々の支えで高校に進学・卒業する。経済的理由で大学進学は断念。就職するも,厳しい労働条件により退職。現在はアルバイト。
18さん	19	高校中退	女性	無業	高校中退後,アルバイトを転々とする。現在は無業。近々他のアルバイトを始めることになっている。
24さん	16	中卒	女性	無業	中卒後,学校紹介でアルバイトをするが,短期で辞める。現在は無業。
25さん	18	定時制高校在学	女性	アルバイト	定時制高校に進学。高校入学時からアルバイトを続けている。高校卒業後に結婚の予定。
26さん	16	通信制高校在学	女性	アルバイト	小学校から不登校。美容師になることを希望するも,美容師学校への入学が,高卒が最低条件となったため断念。中学校卒業後,アルバイトを転々とする。現在はアルバイトと内職を続けている。
36さん	20	高校中退	女性	パート	高校中退後,妊娠,出産,シングルマザーに。アルバイトを転々とし現在はパート職員として働いている。
39さん	15	定時制高校在学	女性	無業	定時制高校生。アルバイトを探しているが,年齢が15歳ということもあり,なかなか雇ってもらえない。

※西田の表から一部抜粋して作成した。

3．3．1　生活不安定な家族

まず，彼女たちの家族のありようをみていく。

お父さんは土方をやってた…でも，糖尿でドクターストップがかかったから，もう仕事はやってない。生活保護受けてるから。（略）（それ以前も父親は）お母さんにね，「これが今月の生活費やぞ」，みたいな，「これでやりくりせぇ」みたいな感じで渡して，残りのお金は俺のみたいなめちゃくちゃ。（略）私，中学校の時から，もうバイトやってたから（17さん／20歳／女性／高卒）。（p.75）

【（小学校4年から不登校を繰り返すが）お母さんは学校に行ってる，行かないというのは，あまり知らなかったってことなのかな？】知ってたけど，何も言えへんかった。【あ，そう。行っといた方がいいよとかそういう話は？】そんなんは別にせえへんかった。（略）【（家族の人は）何か言わはった？「中学校出たら働くねんで」ってずっとお友達と言ってた時とか。】いやお母にも言ってた，「働く」って。【ほんとに？「働いた方がいい」って言ってはった？】いや，「どっちでもいい」って。「本人が決め」って言われてて，「ほな働くわ」って言ってたけど。（略）【じゃあ，お母さんもけっこう若い頃苦労してこられて。】うん。【というような話はよく聞く？お母さんはこんな苦労してんで。】だから私には普通通りに，生きてほしいみたいな。だから別に，「これ食え」とか。私好き嫌い多いねん。だからそれでもお母は別に，徐々に慣らしていけみたいな。無理に食べさそうとはせぇへんから。【普通にっていうのは，高校行きながら？】だからお母が，そういう苦しんだことは私にさせへんようにみたいな。だから別に，家出しようが別に，そういう，何回もあったけどな家出するのは，私も。家おりたくなくて。反抗期やってあったけど，それはそれで，自分もわかってくるやろうみたいな感じでほっとかれてたからな。絶対家戻ってくるのわかってたから。【あ，待ってはった。】だから警察には電話せんとそのままずっと家でおった，みたいな（39さん／15歳／女性／定時制高校在学）。（p.103）

17さんと39さんの家族についての話を紹介した。これらの語りから以下の2点を確認できる。ひとつ，生活保護の受給や厳しい家計など生活の状態は過酷であること。ふたつ，生活不安定な家族を基盤とするもうひとつの価値規範が存在すること。17さんの家族では，父親の給料をめぐるやりくりや，彼女が中学生時のバイトが家族で黙認されていること，また39さんの不登校や働くこと，そして家出をめぐる家族の対応などである。この他にも父親の泊り勤務の多い18さんの家族では，夜遊びをめぐる基準があまいことが語られる（p.92）。このように，中間層の家族では確認できない，生活不安定層固有の家族内での価値規範を確認できる。

3．3．2　学校への意味づけ

彼女たちの学校への意味づけについて語られた箇所を以下に引用する。

【（中3で）働こうと思いはったんは何故なんでしょう。勉強したくない？】勉強したくないし，まず家を出たかった。毎年というか，一番上の（きょうだいの）時もそうやし，真ん中のときもそうやし，進路（決める時期）が近づくと，多分上2人もイヤと言ってたんです，（高校）

行くのは。家を出たいから働くって言ってたんですけど，そこからお父さんともめるみたいな感じで。(略) 夜とかも関係なく，ずーっと説教じみた説得。(略)【 お父さんはどういう言い方してました？何で高校行かなあかんかとかいう。】やっぱり今の世の中，学歴もあるし，お前らの場合は，はたから見たら，結構差別される側やから[16]，ちゃんと学歴つけて，普通の人と同じぐらいの地位を持って出てる方が，何も言われへんやろというような (18さん／19歳／女性／高校中退)。(p.91)

18さんの学校体験についての語りを紹介した。この他にも24さんは，「勉強イヤ」と語り，高校受験をしなかった (pp.80-81)。25さんは，小学校の教師のえこひいきをイヤな出来事として語る (p.93)。26さんは，小学校に行っておらず，行っても保健室ですごし，友だちの家に泊まっていたと話す (p.77, pp.81-82)。これらのことから，学校へのこだわりはそれほど大きくないことを確認できる。

また18さんは進路についてのやりとりで「家を出たいから働く」と語り，早期に家を出て働くことを希望している。学校に行くこと，進学することは，家からの脱出を意味することでもある。問題含みの家から日中だけでも脱出できること，またかつては階層移動が夢見られ親の階層や職業世界からの脱出でもあった。ただし18さんにとっては，そのような「脱出」する機会としても，学校は機能していないことを確認できる。

3．3．3　遊びと落ち着き

このような家族や学校から脱出する最初の契機として，友だちとの遊びがある。そして遊びはしばらくして落ち着いていく。その過程についての語りを紹介する。

10さんは【若くて子どもを産むというのは，もったいなくない？】との問いかけに対して，「でも，別にもう遊びたいとかはないし」，「もう，落ち着きたい。これからやりたいこともないし」と答えてくれた。(10さん／20歳／女性／高卒) (p.96)

まだプータローの子も友だちの中にはおるんやし。で，好き勝手遊んでる子もおるから，そぉゆぅ〔原文ママ[17]〕――打越〕生活に戻りたいなって思う時がある」(36さん／20歳／女性／高校中退) (p.84)

学校の体験や家での出来事とは対照的に，遊びへの没頭は彼女たちが懐かしむ思い出となる。それらの遊びについて西田は以下のように述べる。

「遊びで夢中」などと表現されるその内容は，カラオケやボーリング，友達の家でのおしゃべり，といったものであり，それは毎日続けたいほど「楽しい」ことなのだろうかと，この調査の期間中に何度か疑念を抱いたことがある。(p.111)

語りからうかがえる限りでは，彼女〔10さん――打越〕の場合それほど「遊んできた」経験はなさそうで，「落ち着きたい」と思わせるのは，ハタチを過ぎて1人でいることに意味を見出せないことからきているのではないだろうか。彼女たちの置かれた状況，すなわち低い学

歴，資格をもたず安定した就労先のないアルバイト生活では，自身のキャリアアップと収入増は考えにくい。後に触れるが，配偶者として彼女が希望する「現場系」肉体労働者は，若い時期には収入が高くても加齢とともに収入が大きく上がることは期待できない。結婚時期を先延ばしすることに合理的な理由，メリットを見つけられないことが，「もう落ち着きたい」という言葉の背景にあるのだろう。（pp.96-7）

ここで西田は，彼女たちが「キャリアアップと収入増」を目指していることを前提として，彼女たちの遊びが本当に楽しいのかと疑念を抱く。これらの西田の説明は，あまりにも荒く，「偏狭」な世界に生きるのはむしろ彼の方ではないかとさえ考えてしまう。カラオケやボーリングへ繰り出すことの意味，そこへ誰が集い，それは校区を超えたものか，そしてそこへ通うことの彼女たちが生きる世界におけるステータスなどに注目する必要があるだろう。またそれらの場所へ繰り出し，いつものメンバーで朝まで語り合うことは，楽しいか否かだけではなく，さまざまな資源や情緒的な安心感をえる場となりえる。また学校や家族の存在は彼女たちの生き方に大きな影響を与えていなかった。他方で遊びの場は彼女たちの生きる指針を与える基盤となり，彼女たちが将来像を描くために欠かせないものとなっていく。

３．３．４　ライフステージとともに移行する女の子つながり

上で女の子たちが遊びに没頭し落ち着いていく様子を確認した。ここではそこで重要な役割を果たしている女の子つながりについてみていく。

最近高校の友達で結婚した子が多くて，離婚した子もおるけれども，そんなんを聞いていたら置いていかれているような…（略）仲良かった子が，みんなといっていいぐらいに結婚しているか，それか彼氏と同棲している（10さん／20歳／女性／高卒）。（pp.95-6）

最近，すごい周り結婚し出して，しかも，「できちゃった（婚）やねんけど，みんな。みんな子どもできて落ち着いて。まあ未婚の子もいてますけど。（略）18で結婚やってる子もいるし，19（でも）。（略）今年成人した子の子どもが4人ぐらい同級生なんですよね，子どもも。それぐらいもうラッシュ，今。今年もまた産まれるし，みたいな。何人か，5，6人産まれるし，みたいな（17さん／20歳／女性／高卒）。（p.101）

西田はこれらの語りをもとに，生活不安定層の女の子たちにとっての出産，育児の意味について述べる。彼は「不安定な出身家庭，低い教育達成，低い自己概念」（p.97）ゆえに「大人へのプロセス，ステップ」（p.98）として「十代の妊娠」が起こっているという。そしてその要因については，以下の引用をもとに説明する。

彼女たちにとって，妊娠することは大人になることであり，まわりからちやほやされたり世話を焼いてもらえる，自分が大事にされる，人生の中で唯一の経験だからなんです（Osler,A.&Vincent,K.,2003：151）。（pp.97-8）

確かに彼女たちにとって，妊娠することは重要な出来事である。ただしそれは「人生で唯一

ちやほやされる」からではない。そのことを確認するために女の子つながりについて整理しておく。

上の引用で10さんは結婚や離婚をめぐって，17さんは出産をめぐって，周囲の女の子の状況について語っている。女の子の間に密なやりとりがあり，お互いに強い影響を与えていることを確認できる。より詳しくこのつながりをみると2つの機能を確認できる。まずは，10さんが「最近高校の友達で結婚した子が多くて，離婚した子もおるけれども，そんなんを聞いていたら置いていかれているような…」と上で語っているように，女の子たちのライフステージの移行について，生じる出来事やそのタイミングを含めて強く方向づける機能である。それは結婚や出産，子育てへとライフステージを移行するにつれて，かつての女の子つながりをともに形成した周囲の友人が一人またひとりと抜けていき，取り残されてしまうといった孤立と紙一重となっている。

他方で，17さんがシングルマザーの友人をみて「でも，そういうふうに落ち着きたいなって思う」(p.97) とポジティブに語るように，シングルマザーになることや離婚することに関しては強力な支えとなっている。学校や家族からのサポートやケアが十分に期待できない女の子たちの出産・育児において，なにより周囲の女の子とのつながりは大きな役割を果たしている。

このように，生活不安定層の女の子つながりは，ライフステージの移行とともに乗っているときには支えになる一方で，そこから外れると強烈に疎外感を抱く要因となる。ここに女の子たちのライフコース移行による困難さを確認できる。上の引用からは，なぜ彼女たちが「いま」結婚や出産に敏感なのかが説明できない。彼女たちにとってそれらの移行を経験しそこなうことは，周囲の女の子とのつながりから疎遠になることである。彼女たち自身のライフステージの移行と同時に，女の子つながりもその都度に再編されていく。妊娠は「ちやほやされる」から大事なのではなく，ライフステージの移行とその都度の女の子つながりの再編に無事に遅れずに乗っていることを象徴的に表す出来事として重要なものである。

3．3．5　女の子たちはなぜガテン系の男性を好むのか？——男性の職業をめぐる意味世界

最後に，彼女たちの学校・家族の経験，そして女の子つながりなどを基盤として，選択される男性の職業をめぐる意味世界についてみていく。

> サラリーマンとかはイヤや。【何で？】リストラとかイヤや。(略) 肉体労働をしている人の方が好き。男らしい。【好き！？】何か男らしいやん。…大工さんとか。【何か憧れる人がおったとか？】そうでなくても，今までも彼氏はみんなそんな人だった。【やっぱりいいなという感じだった？】サラリーマンは考えられへん。【やっぱり身近にいないというのもあるのかな？】いない。【実際にお出会いをして，そのうえでイヤなの？それとも】サラリーマンとは出会ってもいない。…スーツとかを着ていても，えーっていう感じ。【大企業でもサラリーマンはだめですか？】うん。ペコペコしているような (10さん／20歳／女性／高卒)。(p.99)

> 「鳶してる人が一番好きやけど。【そうなんや！】彼氏も鳶しとった。すごい好きやねんけど，仕事がなくなったらおしまいやから，やっぱ安定してる人かなって。付き合うのとかでは全然鳶さんの人の方がいいけど，安定してる人より。雨になったら休みになるし」と語る

⑱さん（19歳／高校中退）は，収入がいい時期は「毎日食べに連れて行ってもらっ」たが，収入が少ない時期には「えっ，これだけみたいな」ということもあったと語っている。（18さん／19歳／女性／高校中退）（p.114）

サラリーマンと営業マンはあんましな。【イヤ？】うん。イヤやけど。【工場とかで働いている人は？】も，イヤ。【どういう人がいい？】土木関係とかかな。【サラリーマン，身近にいる？営業マンとか】おれへん。【付き合ってる友達とか土木の人とか多いんかなあ？】土木…多いんかなあ。（工場でアルバイトで働いている人の給料を聞いたら安かったので）ええことないなあって。…だから，（工場の仕事では）仕事ない時は1週間とか休みやし。土木やったら，雨の日ぐらいやから。梅雨時が一番しんどいくらいかなあ（36さん／20歳／女性／高校中退）。（p.99）

18歳で建設作業員の彼は16歳の女性㉔さんに「結婚しよっか」と話し〔 た――打越〕，（24さん／16歳／女性／中卒）（p.106）

18歳の㉕さんも高校中退後解体工として働いている男性と結婚予定だという。（25さん／18歳／女性／定時制高校在学）（p.106）

19歳で塗装工のバイトをしているパートナーとつきあっている16歳の㉖さんは，【今，彼氏と住んでるって言ってたけど，結婚する気ある？】「うん，したい」【いつまでに結婚したいとかある？】「19まで」と答える。（26さん／16歳／女性／通信制高校在学）（p.106）

当該書に記載されている，生活をともにする男性の職業についての語りをすべて列挙した。まずは西田の説明を確認する。

結婚相手の職業については，女性のほぼ全員が「フリーターはダメ」と語り，相手の経済力を必須の条件としてあげている。また，結婚相手の職業についての希望を具体的にあげる者は少なかったが，そのうち3人が，「鳶など現場で男らしく働く人がいい」と同じような内容であったことは，彼女たちの身近にいる職業モデルの限定性をうかがわせる。（pp.98-9）

彼はガテン系をひとくくりとして，議論をすすめる。また彼女たちはサラリーマンとは接触がないがゆえに，サラリーマンについて拒否するのではないかとの説明を行っている。

これに対し，まず18歳を境として，年上の10さん（20歳），18さん（19歳），36さん（20歳）と，年下の24さん（16歳），25さん（18歳），26さん（16歳）と区分してみていきたい。10さんは肉体労働，そのなかでも具体的に大工さんと答えており，18さんも「鳶の人が好き」と語る。また36さんは土木関係と答えるもののそれは製造業とは異なり休みの少ない点を重視して希望している。他方で，24さんは「建築作業員」，25さんは「解体工」，そして26さんは「塗装工のバイト」と述べている。また3人ともそのまま結婚したいと述べ，26さんは結婚時期について19歳と答えるもののその理由については「別に何も」（p.95）と漠然とした受け答えとなっている。18歳以下の3人は西田同様に漠然とガテン系ととらえているのに対して，上世代の3人はガテン系の

中でも技術職である大工さん，給料の高い鳶[18]，そして休みのない「土木関係」とより具体的な選択となっている[19]。つまり上世代の3人にとっては男性の職業をガテン系としては認識しておらず，むしろ「フリーター」や不安定就労，単純労働とは異なることが重要であるとよめてくる。ガテン系の職種やそのランク付けまでよむことで，劣位におかれた人々が，より劣位の人々と距離をはかりながら，自らの存在証明を行う，そのような実践として浮かび上がってくる。

共著者の石岡丈昇は，マニラの貧困世界にいきるボクサーを対象としたエスノグラフィで，彼らが必ずしもアメリカンドリームとしてチャンピオンを目指しているわけではないことを指摘する（石岡2011）。それではなぜ彼らは，日々のストイックな練習に耐えるのか。石岡によると，それは彼らが二度とかつて過ごしたゴミ山での生活には戻りたくないと意気込んでいるためである。

そのようにみれば，彼女たちがサラリーマンや医者といった「裕福な生活」競争の上位に位置づけられる職業に就く男性を選ばないのは，彼女たちの周囲の友人や知り合い，また自らの今までの経験などから，不安定就労ではなく，単純作業員ではなく，フリーターではなくといった否定形で，それぞれの職業を選んでいるからだとはいえないだろうか。少なくとも彼女たちは，大きな社会構造や，何十年も先の将来を見越して選択する「上昇婚」ではなく，だからといってなんら統制不能な状況におけるその場限りのノリや直感で男性の職業を選択しているわけでもない。西田はサラリーマンを否定してガテン系を選択することに焦点をあてているが，実際には18歳を超えた女の子たちは，単純労働ではない技術職である大工さん，不安定就労ではない給料の高い鳶，そして休みの多いフリーターではない休みのない「土木関係」として，いったん否定形を経由する形だが積極的に男性の職業を選択しているようによめてくる。

3．4　パッケージ化される貧困問題に抗して――もうひとつの女の子の世界から

ここまで，『排除する社会・排除に抗する学校』で，西田が展開した生活不安定層の女の子たちの移行過程を，彼の提示したデータを再解釈する形で検討してきた。最後に簡単に振り返っておきたい。

まず彼女たちの家族生活は過酷であること，そしてそこを基盤とするもうひとつの価値規範が存在することをみた。続いて，彼女たちにとって学校へのこだわりはそれほど大きくないこと，それに加えて家族から「脱出」する機会としても，学校は機能していないことを確認した。そのような世界から飛び出た先が「遊び」の世界であった。そこでの日常を通じて女の子つながりは形成される。ただしそのつながりは，結婚，出産，子育てといったライフステージの移行に乗っているときは支えとなるが，そこから外れることでより強力に疎外感を与えるものであることをみた。そのような世界に生きる，彼女たちは男性の職業を積極的に選びとっていた。家族の規範を基盤にしつつ，女の子たちと交わす情報や周辺のモデルケースの存在によって，彼女たちは将来像を徐々に具体化していく。ガテン系の職種やそのランク付けまでよみながら，選択するようになるのがだいたい18歳を超えたあたりであることをみた。

このように西田とは異なる形で，彼女たちの移行過程について説明してきた。彼女たちの生きる不安定な生活は親から引き継がれ，また生活をともにする男性や子どもらとの新たな生活でも引き継がれる可能性は高いという，西田の提示した結論については筆者（打越）も同様に

考える。ただし，それは西田の説明のように彼女たちの生きる世界が狭く，知識が不足しているためではない。むしろ，彼女たちは，家族や女の子たちのつながりから，もうひとつの強固なモデルや価値規範を受け取り，そこから外れまいと懸命に生き，そしてそのつながりにもとづいた男性とその職業を積極的に選んでいる。その結果，不安定な生活は世代を超えて引き継がれている。

西田は当該書の議論から2つの実践課題を示している。ひとつ，「学習離れ」対策として，勉強・学校から背を向ける前の小学校入学直後からの学力向上である（p.246）。これに対して本節では，彼女たちは芳醇な意味世界に生き，将来についても積極的に選択していることをみた。よって，彼女たちが必要な知識を自ら学ぼうとするその前段階で，学力対策をすることに大きな意義は見出せない。そもそも彼女たちが求める知識と，学校の学力との関連の検討から入る必要があるだろう。ふたつ，学校・教師のサポート範囲を家庭・親にまで広げることである（p.246）。これについては，どのデータや課題から導かれたものなのかがわからない。本稿では，家族は支配的なものとは異なる独自の価値規範を形成していることをみた。よって，「サポート」と称する教師から親への働きかけは往々にして衝突しかねない。

このような西田の議論の進め方は，前稿で指摘した〈問題者発見レンズ〉（宮内ほか 2014b）にもとづいて描かれた現実と，本論文の指摘する「万能型フレーム」によって導かれた結論によって構成されていると指摘せざるをえない。彼女たちの移行過程をその生活の文脈からは乖離した「偏狭」や「誤解」といった西田の恣意的な視点でつかむことからは，〈問題者発見レンズ〉の存在を確認できる。またそこから導かれた上の実践課題は描かれたデータから導かれたものとは位置付けられない，「学力向上」や「親のサポート」といった「万能型フレーム」によるものであった。

〈問題者発見レンズ〉でせまり，「万能型フレーム」で蓋をすることで，貧困問題はきれいにパッケージ化される。また貧困の解消をめざす各種支援団体によって重宝されることで，パッケージはより完成度をあげる。いうまでもなく，貧困の社会学研究はこのパッケージを解体するところから始めなければならない。そのためには，貧者の生きざま（ハビトゥス）や視角などの生活のパターンを〈生活―文脈〉に沿って丁寧に蓄積すること，その積み上げにもとづいて議論を展開することしかないだろう。本節の作業はその一試論である。（打越）

4．代弁される「排除する学校・教師」――学校・教師との関係の結び方を通して――

4．1　はじめに――批判的検討の難しさ

本節は，『排除する社会・排除に抗する学校』における学校・教師分析を批判的に検討することを目的とする。本稿の他の節では，本書の問題点が鮮やかに剔出され，そこからふまえるべき検討課題が明瞭に示されているだろう。しかし，本節の切れ味はすこぶる鈍いものとなっている。本節の執筆は，筆者（新藤）にとって，非常に難儀するものであった。それは取りも直さず，西田の議論の多くは筆者にとって首肯できるものと感じられたし，それは筆者の理解する限り，現在の教育社会学の水準にあてはめてもおおむね妥当だと考えられるからでもある。

ただし，そのなかでも考えるべき論点をいくつか指摘しなければならない。それは，『排除する社会・排除に抗する学校』だけでなく，現在の教育社会学研究の多くも抱える問題だと考

えられる。

4．2　排除する学校・教師――西田による学校・教師研究の知見（1）

まずは，『排除する社会・排除に抗する学校』における，学校・教師研究の知見を確認したい。その第1は，学校・教師が「貧困・生活不安定層」の子どもたちを排除し，貧困や，階層構造全体の再生産に加担しているということである。

この点を中心に論じた6章（「排除する学校・教師」）では，まず，海外の諸研究を引きながら，①「中産階級出身の教師が当然とする理想のクライアント像と，下層出身の子どもの姿が大きく隔たっている」(p.184) とする「クライアント問題」(ベッカー)，②不平等を創り出す存在としての教師（リスト），③高校の進路指導において，生徒の能力・成績でなく，教師の複合的な解釈・判断・指導で能力別集団に配分される状況（シコレル－キツセ），④教師が貧困経験を持っておらず，対応が不適切になる構造（レヴィン－リッフェル），そして，⑤これらの貧困層の子どもたちに対する教師の姿を通じて，当の子どもたちが「教師は自分を目の敵にしている」という意識を持つこと（テス・リッジ）などの知見を紹介している。このように，海外では，教師が，「貧困・生活不安定層」の子どもを学校において排除し，貧困の再生産に貢献してしまっている実態を明らかにしてきたことが説明される。

これに対し，日本では「教師を再生産の担い手とみなす研究もほとんど見られない」(p.186) と指摘する。しかし，西田が行った在日韓国・朝鮮人への聞き取りでも「学校の教師がもう，まるまる差別する」(pp.186-7) といった声が聞かれるように，教師によるマイノリティへの差別があったことが確認される。これをふまえ，数は多くないが，教師が貧困層の子どもに「一人ぼっち」，「暗い性格」，「乱暴」などといったネガティブな評価を与えていること（籠山 1953）や，「低階層の子どもは教師と疎遠な関係しかもて」ていない状況（三宅 1957）などを指摘する研究を紹介している。これらの日本においても見出されるクライアント問題について，久冨善之や志水宏吉，耳塚寛明らの研究を引きながら，教師の出身階層の高さが関係しているとする。そのことは，「挫折も経験せんと，エリートで勉強もできて，父さん母さんも立派な人で育った人が教師になってる場合が多いけど，そういう人らにここの子どもらのことをほんまに理解するのはむつかしいんちゃうかなぁ」(p.191) という西田が教師から聞き取った語りからも裏づけられるとする。ここから西田は，「教師は中・高階層の出身であり，準拠集団をそこに求める職業集団であるとみなしていいだろう。そして，貧困・生活不安定層の子どもや親の姿を表面的な表れでしか捉えず，役割遂行における負担要因，阻害要因としてとらえてしまう傾向の背景に，こうした出身階層の影響を読み取ることができる」(pp.192-3) と述べている。このように，「学習を成立させなければならないという教師の職業役割」(p.193) に基づくクライアント問題と教師の出身階層の問題という構造的な背景が「排除する学校・教師」という実態を招いているとする。

このような問題状況を克服する展望として，学校・教師を「倫理的に非難するのではなく，そこには構造的背景があることを踏まえて，困難な条件にある地域の学校への資源配分，親子が抱える困難さと生活の現実を教師が理解するためのサポートが求められる」(p.197) としている。

4．3　排除に抗する学校・教師――西田による学校・教師研究の知見（2）

一方，第2に，「貧困・生活不安定層」の子どもを排除するのではなく，反対に排除に抗する学校・教師のあり方も指摘されている。この点を検討したのが8章（「排除に抗する学校・教師」）である。ここでは，「教師個人としてではなく学校として，困難，不安定な条件にある子どもたちを支えようと取り組みを重ねている学校が，数は少ないとはいえ現実に存在している」（p.238）例としてZ中の事例が取り上げられている。Z中では，児童養護施設からこの学校に通っていた子どもたちの間で深刻ないじめや暴力があったが，学校側の指導が行き届かなかったために，加害者の生徒が，「故郷ともいえる施設」（p.239）を離れねばならなくなった事態が反省され，取り組みが始まることとなった。その取り組みの中心は，休日も勉強させようとしたり，高校進学後もアルバイトをさせようとしたりする「貧困・生活不安定層」の子どもたちへの徹底した学力保障と進路保障である。さらに，施設の子どもが，自分自身にも，周りの子どもにも受け入れられるようにするために「自分史」を書かかせ，クラスで発表させるという活動も行っている。このZ中のような学校を「排除に抗する学校」として位置づけている。

これまでの学校では，「教師はそんな親の生活に，口をはさむものではない」（木下 1997：106）（p.256）とされてきた。しかし西田は，「近年の変化の下では，従来の想定や学校の守備範囲を守っていては，子どもの教育を遂行することは不可能になった」（p.257）と指摘する。その際，アファーマティブアクション（積極的格差是正措置）の必要性を提起する。すなわち，「貧困・生活不安定層」の子どもたちの生活の厳しさは，「自身の努力や能力の不足がもたらしたものではなく，条件の不備によるところが大きい」（p.260）と把握される。そして，この条件の不備を解消するための「特別扱いについての教師自身の認識を深めること，周囲の子どもや親を含めて特別扱いの意義づけと説明を十分行ない理解を得ること，また，特別扱いを感じさせない配慮などが求められる」（p.260）とされる。

さらに，このような「排除に抗する学校」のあり方を提示すると，教師からは「『日々の仕事に追われて心身ともにギリギリ。これ以上わたしたち教師にガンバレと言われても，現場を知らない大学の先生の無責任な発言としか受け止められない』とコメントを返された」（p.249）という経験も紹介される。これに対しては，「排除に抗する学校」では，教師たちが「しんどくなりきらないために，先回りしてしんどい取り組みをしている」（p.261）のだとし，「子ども・親・地域から受ける手ごたえを感じつつ生き生きと動きまわる姿，そして，同僚教師に見守られ，多くの経験を重ねながら成長していく姿を目にしてきた」（p.271）と述懐する。つまり，「排除に抗する学校」は「『しんどい』学校」ではないとし，「排除する社会」における今後の学校のあり方と位置づけられ，本書は閉じられる。

4．4　教師集団における〈問題者発見レンズ〉の生成・伝達

以上が『排除する社会・排除に抗する学校』における学校・教師研究の主要な知見である。しかし，これ以外にも，西田の示すデータからは，興味深い知見を引き出すことができる。その一つは，教師集団における〈問題者発見レンズ〉（詳細については後述）の生成である。

6章では，次のような教師の語りが紹介されている。少し長いが引用したい。

> どういうのかな，「文化住宅に住んでるからあんな子どもに育つんや」とか，なんかそういうような感じで，教師も捉えてる部分ってやっぱありますやんか。それ聞くとすごく腹立つん

ですよ，やっぱり。自分はずーっともう「文化」に育ってるから。親も経済的に豊かじゃなかったし，いわゆる労働者ですわな親父は。(だから) そういうふうな見下げたような感じで言われたらすごく反発したくなりますよ。「何言ってんねん。俺もそやで」と。「あの家あんなんやから」とかね，よう言いはる人おるけど。わりと俺は，ここは好きですから。「文化」多て，低所得者が多いとか離婚率が高いとか，ほんまにちょっと崩壊家庭が多いなと思う。教師になったらそういうことがよく見えてくるんでね。でも，そういうふうにくくられて考えられることにはすごく抵抗あるんですよ。自分はもうずっとそういうとこに育ってきてるから，自分の友達見ててもそんなまんざら悪いやつばっかりじゃなかったし。まぁ，逆にね，そういういい環境で，親もたとえば大学出てはって，一戸建の大きい家に住んで，坊ちゃんお嬢ちゃんで来た人には負けへんぞというね，しょうもない意地みたいなもんはありますわ。「こういう地域で教師すんのは俺みたいなタイプが逆にええんちゃうか」とか思ったりね。挫折も経験せんと，エリートで勉強もできて，父さん母さんも立派な人で育った人が教師になってる場合が多いけど，そういう人らにここの子どもらのことをほんまに理解するのは難しいんちゃうかなぁ。逆に自分みたいなタイプの方が，喧嘩もして先生にどつかれたりとか，まぁ経済的にもそんなに豊かじゃなかったし，そういう環境で育ってきたような人間がここにはやっぱり必要なんちゃうかなと思ったりはします。おこがましいですけど，すごくね。自分は決してエリートじゃなかったですから。(p.191，傍点は新藤)

これは，2項でも一部紹介したもので，『排除する社会・排除に抗する学校』の1章で主に分析された「文化住宅街」出身の教師の語りである。西田の分析では，教師は「エリート」出身が多いため，「貧困・生活不安定層」の子どもたちの生活を十分に把握しづらいことの証左として掲げられている。しかし，ここで注目したのは傍点を付した「教師になったらそういうことがよく見えてくるんでね」という部分である。「そういうこと」とは，「文化住宅街」に見られる低所得層の多さ，離婚率の高さ，崩壊家庭の多さといった問題群である。ところが，こういった問題群は，「文化住宅」に育っていながら，この教師は教師になるまで見えていなかった，ということである。それは，「文化住宅」を離れ，高等教育機関に進み，教師になることで獲得された視野の広がりといえよう。しかしその反面，教師になれば，こういった問題群が「問題」として認識されざるを得なくなったとも考えられる。つまり，教師集団には，「文化住宅街」の低所得層の多さ，離婚率の高さ，崩壊家庭の多さを「問題」として受け止める構えが存在し，それが教師集団内で受け継がれていることを推測させる。これは，前稿 (宮内ほか 2014b) で，石岡丈昇が提起した〈問題者発見レンズ〉という概念を用いれば，教師集団での〈問題者発見レンズ〉の生成・伝達が生じていると捉えられる。

〈問題者発見レンズ〉とは，「経験的事実に先立って，『問題者』が誰であるかを恣意的に発見し同定するレンズのこと」(宮内ほか 2014b：203) である。教師集団内では，「文化住宅街」に暮らす「貧困・生活不安定層」の生活実態や意識を十分にふまえずに「文化住宅街」が問題であることを所与の前提とするような捉え方が受け継がれていることがうかがえる。

この教師集団の〈問題者発見レンズ〉は，おそらく西田が指摘するように，教師の多くが所属する中・高階層の文化に立脚しているものだろう。しかし，「文化住宅街」の出身である教師であっても，留意しなければこの教師集団の〈問題者発見レンズ〉に絡めとられてしまいかねない可能性が示唆されると受け止められる[20]。

4．5　他者に代弁させる「排除する学校・教師」

次に注目されるのは，2項で整理した「排除する学校・教師」という知見の導かれ方である。この知見が展開された『排除する社会・排除に抗する学校』の6章（「排除する学校・教師」）は，この著書のなかでもっとも中心的に学校や教師の分析がなされている章でありながら，西田による教師の聞き取りは前項で紹介したものと，もう一つ（p.190）の2つしかない。つまり西田は，自ら行った教師への聞き取りデータではなく，ほとんどすべてを他の研究者が手がけた先行研究，つまり二次データに基づいて「排除する学校・教師」という知見を導いている。

それでは，西田が6章で展開した「排除する学校・教師」という知見は，西田のデータからは導かれないのだろうか。他章を確認すると，決してそういうわけではないといえる。たとえば，1章「都市流入者の地域形成と大人への移行過程」では，次のような教師の聞き取りが紹介されている。

> 中学校の教師からは，「経済的にしんどいというのは少ない。でも蓄積にはつながらない。入ったら使ってしまう。『昨日テッサ（ふぐの刺身）を何人前食べた』とかいう話を生徒がしてきて，頭にくることがありますよ」とのエピソードが語られた。（p.28）

> 「やっぱ，それなりの所得水準，ちょっとしっかりしたとこの家はね，家庭訪問とか行くとやっぱりそういう雰囲気はあるけど。ちょっとした所得水準とらせるためにも勉強させなあかんというような。学歴，上の学校いかなあかんなという。（校区に）大きなマンションがあるでしょ。あそこの家なんかやっぱりちゃいます。しっかりしてる。こっちの方の人（「文化住宅街」の親）とかはやっぱり全然ちゃうと思います。子どもに進路をまかしてますねぇ。『この子にまかしてますねん』て。まかしてもうたら困んねんけどなぁ。親の希望は『高校までは，まぁねぇなんとか行かしたいですけどねぇ』ぐらいです。大学なんかは出てこないですね。ほとんど。本人らも，考えてないと思いますね」。（p.37，中学教師の語り）

> 「多くの親が中卒だから，子どもが高校を出たら『親を超えた。それで十分』という意識があるのではないか。学力が高くても，初めから就職希望というケースが珍しくない。そういう子や親は，大学をハナから考えていない。大学に行くことの意味がわからないのだろう。『遊びに行くところ』としか見ていない。親の仕事には学歴なんか関係ない。保護者自身に大学の経験，知識がなくて，『高校出たら職人になって働けよ！』となる。教師が保護者と子どもを説得して大学を受けさせるというケースもある。『大学に行っておけば，こんな可能性も開けますよ』という説得をするのだが」。（p.38，中学教師の語り）

これらは，2項でも確認した「クライアント問題」と「教師の出身階層」という構造的背景を浮かび上がらせるものであり，そこから「排除する学校・教師」の姿を読み取ることは可能である。しかし，これらの記述は，「文化住宅街」の家庭が持つ教育意識や生活意識を示すデータとしてのみ位置づけられている。そこには，6章で展開されたような，「教師がこのように捉えている。だから，『貧困・生活不安定層』の再生産につながるのだ。ここには排除する学校・教師の姿が見て取れる」といった，学校や教師が抱える問題を糾弾する姿勢は存在しない。つまり，西田は，自分が得た教師からの聞き取りは学校・教師の抱える問題の指摘には用いず，

学校・教師の問題を指摘する際には，他の研究者に代弁させるという，ある種の「逃げ」を見せている。

この点で，前稿（宮内ほか 2014b）で扱った久冨善之らの『豊かさの底辺に生きる』（久冨編 1993）よりは，「後退」を示している。前稿でも指摘したように，久冨は，教師分析の際に，自らと教師とを隔てるヴェールを取り去ることが徹底できず，新たな「定型像」を生み出すことにとどまった。それは，学校・教師側に「外から調査団が入ってきて，あれこれ調べて，学校を批判して行った，というような印象を与えてしま」（久冨編 1993：229-30）うという結果を招くことになった。しかし，それでも，自分たちが行った調査に基づいて，自分たちが見出した姿を学校・教師に提示するという作業は行っていた。そうであるがゆえに，学校・教師側のネガティブな反応も知りえたわけである。

これに対し，西田は，学校・教師のネガティブな姿を描く際には，自らが関わり，話を聞いた教師との対峙を避けている。

4．6　正視されない学校・教師の「ドロドロ」

しかし，西田は，学校・教師のネガティブな姿を描くことから完全に逃げてきたわけではない。たとえば，『よみがえれ公立中学』（志水・徳田編 1991）の舞台となった「南中」のエスノグラフィーでは，次のような教師の聞き取りや姿が紹介されている。

> 「最近，『親がバカなんやから，なにやってもだめ』と仲間内でいつも言っている。この頃は子どもに愛情を感じられなくなった。『このバカらが』と思ってしまうんよ。昔は『この子らに関わっていかんといけん』と思ってた。最近の子は仁義が通らん。『○○（自分のこと）があんだけやってくれたんやから』と子どもが思わんようになった。」「万引が見つかった子どもで，余罪がありそうやったんで，夕食を食べさせずに，もちろんこっちも食べんと，『おどりゃぁすどりゃぁ』でボコボコにしながら出させたら，（余罪が）出てくる出てくるで，数十万円単位。でも，それを聞いた親が，『子どもにご飯も食べさせず，暴力をふるって』と逆に抗議されて，結局教師がその親に謝りに行くことになったんよ。」／これは，生徒指導主任を数年勤（ママ）めている30代の男性教師の言葉である」（西田 1994：323-4，「／」は原文では改行）

> 「『底にとどく指導』というものがあると考えてるんです。それをするためには，子どものエリアに入ることが大事。学校という場は教師の都合でできてるところでしょ。それに対して，放課後，地域，夜は子どもの世界。その，子どものルールで動いている世界に教師が入っていって，そこで話を聞いてやる。これは，学校で教師のルールを押しつけるのと対になることだと思う。『タバコはだめ』といくら上から言っても，それだけではだめ。ききめはない。家庭訪問は，日本の教育のすごい伝統ですよ。子どもの24時間の生活を把握できるようにしようということでしょ。以前，週に2，3回は子どものたまり場に通ってた時期がありますよ。そこで，僕の目の前ではタバコは吸わない。それが仁義や。そこでは『おい，今タバコどないなってんねん』『減らしてるで』という話もできる。学校ではそういう話は無理です。」（男B40代）（西田 1994：335）

午前中ゲームセンターで遊んでいた男子生徒を担任が職員室に響くほどの音で平手打ちにする。校内でガムをかんでいた1年生の男子を正座させて定規でたたく。まわりの教師達はそれをまったく無視している。（調査――新藤）期間中に直接目にしたのはこの2例だけだが，このような体罰はめずらしくない。（西田 1994：336）

これは，南中で行われている生徒指導の一例である。西田や志水らは，これを「つながる指導」と呼んでいる。「つながる指導」は，学習指導，学級通信の発行，クラブ活動や清掃活動の指導など通常の教育活動の範囲内で行われるものが大半である。しかし，ときには一定程度の生徒の喫煙を黙認したり，厳しい体罰を課したりすることも含まれている。そこには当然生徒の保護者との衝突もあり，「親がバカ」という教師の発言も生じる。このような状況から，教師たちは「生徒指導は学校の中でも一番ドロドロしたつかみどころのないもの」（西田 1994：349）と表現している。

また西田は，「学校の中のことを研究したいなんて，何年も先生やってみないとわかりっこないわよ。研究室でできる勉強をしたら」（西田 1994：349）という言葉を教師から浴びせられてしまう。それでも，こうした校内の「ドロドロ」を正視し，それを剔出する作業を成し遂げてもいる。それは，学校に関わる事件を報じる「ニュースや新聞みとったら，腹が立ってしゃぁないんよ。無責任やし，不謹慎やと思う。自分がここに来て，子どもの相手をしてみたらいいんや」といったものや，「外から無責任なことを言われるのはかなわんから，ちゃんと学校の中のことを見て行って下さい」（西田 1994：328）といった教師の声に，一定程度応える取り組みであったからこそ可能となったものと受け止められる。

しかし，この論文で描かれた学校の「ドロドロ」は，『排除する社会・排除に抗する学校』からは完全に排除され，その痕跡は残っていない。本稿を作成する途上での研究会では，本書よりも元になった既発表論文の方が豊かに実態を描いているのではないかとの意見がしばしば出された。この西田（1994）も，「貧困・生活不安定層」の子どもと向き合う学校・教師を考えるうえでは貴重な知見を提示しているが，『排除する社会・排除に抗する学校』では，加工されて掲載されるどころか，西田自身の文献も11本収められている参考文献リストにすら掲載されていない。まるで存在を完全に「抹殺」されてしまっているかのようである。

だが，この「ドロドロ」を経たからこそ，「排除に抗する学校」も少しずつ実を結んできたはずである。あるいは，このような「ドロドロ」があるがゆえに，教師のクライアント問題は存続し，ますます貧困の再生産へと教師を駆り立てることになるとも考えられる。教師集団の〈問題者発見レンズ〉は，まったくの真空状態から生成されたわけではなく，こうした，多くの教師にとっては正視し，受容することが難しい「ドロドロ」によって形成されたと考えるのが，実態に適っているのではないだろうか。

4．7　筆を鈍らせたのか？

ただし，西田が前項の「ドロドロ」を『排除する社会・排除に抗する学校』に組み入れなかった事情については，ある種の想像が働く。筆者も，今回の西田と同じ立場なら，同じように「ドロドロ」の描出を回避したと思う（もちろん，前提としての「ドロドロ」の把握にすら，筆者ではたどりつけなかったかもしれないが）。そこには，研究の場としての学校との関係を良好に保ちたいという判断があったのではないだろうか。

研究対象との関係については，これまでも重要な研究が幾重にも手がけられてきた。単純にいえば，フィールドと研究者との間に信頼関係が構築されていなければ，有効な調査を行うのは困難である。そこで多大な協力の提供を求める対象である教師との間には，良好な関係を築きたいと考えるのはいたってシンプルな発想だろう。その際に，学校や教師の問題点を列挙するような研究を公表するのは，良好な関係にひびを入れる行為になると判断し，その公表を差し控えるということは稀なことではないだろう。

このように論を運ぶと，志水宏吉が指摘した「筆が鈍る」という問題が想起されるかもしれない。志水は，「エスノグラフィックな報告書なり論文なりをまとめる時に，当事者（教師や生徒）が怒ったり，気を悪くしたりするような文章を書きづらくなるという問題」を「『筆が鈍る』という問題」（志水 1998：20）だと説明している。ただし，志水は「エスノグラフィックな研究の再帰的な（reflexive）性格を考えた時，『筆が鈍る』のは，けだし当然と言えるかもしれない。鋭すぎる筆よりも，時間をかけて鈍らせた筆の方が，教育の『真実』を捉える可能性が大きい，と考えるのは筆者だけではないだろう」（志水 1998：21）とも述べている。つまり，「鋭すぎる筆」で鮮やかに描かれた姿は，得てして「真実」を的確には捉えたものとなっていないのであり，むしろ再帰的にエスノグラフィックな研究を続ければ続けるほど，そこで描かれるのは「鈍らせた筆」によって曖昧模糊に描かれる状況になる。そして，それこそが「真実」を捉えている，ということであろう。もしかしたら，西田も，このような「鈍らせた筆」によって描いたがゆえに，「ドロドロ」は描写されなくなったと反論するのかもしれない。

ただ，志水はこうも述べている。「研究者が彼ら（教師や生徒――新藤）と良好な関係を保ち，彼らからの適切なフィードバックを受けつつまとめられたテキストであれば，彼らは少なくともそれを真摯に受け取るであろう。そして，もしそのテキストが，当事者たちがその中で生きている『全体』を描くことにある程度成功しているとしたなら，たとえ内容的に厳しいものを含んでいようと，彼らは，それを容認しうるテキストだと評価してくれるだろう」（志水 1998：21）。「ドロドロ」が描かれなかったのは，「鈍らせた筆」ゆえなのか，「良好な関係」を築くことが難しかったのか，あるいは単に不必要と判断されたのか。いずれかはわからないが，「排除に抗する学校」を理解するためには，この一度は描かれた「ドロドロ」をふまえることが欠かせないのではないかと思われる。この「ドロドロ」が，「排除に抗する学校」の土台を形成する，重要な〈文脈〉[21]をなすものだと考えられるからである。

そして，「ドロドロ」の公表を差し控えることで，研究者も，そして学校や教師が失うものも決して少なくないはずである。課題を真摯に受け止め，その改善に向けて方策を練る機会を逸することになる。その結果，「貧困・生活不安定層」の子どもたちは今後も排除され続けることになるかもしれない。また，久冨編（1993）と上掲の西田（1994）が発表された1990年代前半には，ある程度学校や教師についてのネガティブな知見の提示も可能であったのが，20年経った現在では困難になっているという可能性もある。だとすれば，この間の研究者と学校・教師との関係の変遷も問う必要があるかもしれない。

4．8　教育社会学の「学校化」問題？

このように考えると，西田の前には，「ドロドロ」を書き控えるという選択のほかに，「ドロドロ」を正視するという選択があったことがみえてくる。この「ドロドロ」の理論的分析を進めることで，学校や教師にも受け入れ可能な教育社会学的な知見を提示するという方向性が考え

られるのではないか，ということである。

さらに，『排除する社会・排除に抗する学校』で示される「反貧困学習」（p.264）などの「排除に抗する学校」などの展望の出し方にも，注意が必要である。たしかに，「反貧困学習」や本節3項で掲げたような学校での教育実践は，一定の可能性を持つのかもしれない。しかし，「貧困・生活不安定層」の子どもが社会から排除される状況は，ひとり学校によってのみ解決されるわけではない。「貧困・生活不安定層」の子どもたちには，学校的な〈文脈〉とはまた異なった〈文脈〉が広がっていることは，3節の打越の議論をみても明らかである。このように，「貧困・生活不安定層」の子どもの〈文脈〉の広がりを，まずは改めておさえる必要があるだろう。

批判的教育学の代表的な論者の一人であるヘンリー・ジルーは，生徒の声に注目することの重要性を指摘する一方，「声に焦点を当てることは単純に生徒が語る，その可能性を称えることを意味するのではない。そのような立場はしばしば怒りの下に横たわっている原因や抑圧的な社会関係に果たしている支配の構造を変革させる集合的な動きへと理論化するのに役立つことなく，怒りを名づけるというナルシズムやカタルシス的経験へと悪化させる。……そのような経験が団結や闘争，ポリティクスといった広い観念と切り離されるのではなく，結びつけられるような，理論的，批判的分析の対象であるべきことが同様に重要なのである」（Giroux 1992＝2005：190）とも述べている。子どもたちの〈文脈〉の実態は，学校外に広がっている。あるいは西田が「排除に抗する学校」と称する学校での教育実践の実態を念頭に置いたとしても，それらは今の学校だけで完結しているのではなく，過去の教育実践の積み重ねといったより広範なつながりを有する。つまりは，空間的・時間的な〈文脈〉の広がりと切り離して，「声」の可能性だけに焦点を当てることでは，実態の的確な把握にはつながらない。

このような〈文脈〉の時間的・空間的広がりを捨象して，学校の枠内でのみ展望を示そうとすることは，「貧困・生活不安定層」の子どもが抱える問題を解決するうえでも，あるいは「排除に抗する学校」の可能性をより開いていくうえでも，障壁とならざるを得ない。しかし，西田を含め，臨床的な教育社会学[22]を標榜した場合，学校や教師の範囲内での展望を示しがちになってしまうのかもしれない。この点は，いわば教育社会学の「学校化」（Illich 1971＝1977）ともいえるかもしれない。

だが，「貧困・生活不安定層」の子どもたちが抱える問題を克服していくためにも，学校・教師の枠内にとどまることは得策ではない。学校・教師の可能性を的確に考えるためにも，子どもたちや学校・教師が置かれた幅広い〈文脈〉の探索が求められるのではないだろうか。（新藤）

5．貧困の自己責任論を乗り越えるために：地域という視点から

5．1　貧困と地域という課題

当該書全体を貫くテーマは，貧困の原因を個人に帰すことによって個人を断罪する自己責任論をいかに乗り越えることができるかという点にあると思われる。これは近年の貧困研究の中心的課題であり，「貧者を作り出し苦難をもたらす社会的・制度的メカニズムが暴き出され，それを語る言葉が供給され続けなければ，貧者はいずれ道徳的な悪のレッテルを貼られて忘却されるだろう」（西澤 2010：7-8）という切実な問題関心への応答といえよう。もっとも，貧困は

個人に責任を帰すべきものではなく，社会の問題であるという「万能型フレーム」を題目のように繰り返すだけでは，自己責任に替えて社会責任を強調するという，その意味では全く同レベルの責任の所在あてとなってしまう。ここで要求されるのは，「貧者を作り出し苦難をもたらす社会的・制度的メカニズム」を暴き出すための理論・方法論である。

この課題を考える上で，地域という視点は1つの突破口を開くものとして注目されつつある。これまでの貧困研究では，貧困と地域をつなぐ研究視角は必ずしも強かったわけではない。これはガンズ（1982＝2006）の議論に代表されるように，貧困など都市における生活様式の違いは，個人属性，家族周期段階によるものであり，地域の人口学的な効果ではないとする，貧困の原因として地域を焦点化する研究への批判が有力だったためである。これに対して近年では，貧困をもたらし増幅させる要因として地域の効果を強調する議論が多く見られるようになってきた（宮内ほか 2014a）。これらは，貧困，社会的排除の地域的集積がさらなる貧困，社会的排除を深化させるプロセスを明らかにし，マクロな社会変動・政策，階層・階級文化などに回収されない，固有の生活文化，ネットワークの母体としての地域に注目する（妻木 2012：500）。そして，貧困を生み出す環境，社会関係，資源，労働市場など，個人に還元されない地域的要因を探り当てることで，貧困の自己責任論からの転換を目指す理論として展開されている（スピッカー 2007=2008：84-86）。

こうした貧困研究の文脈から考えてみた場合，当該書1章「都市流入者の地域形成と大人への移行過程」は，この課題に直接向き合うものと考えられる。ここでは，「社会的排除の地域的現れ」（p.5），すなわち，「排除の地域的顕在化とは，不利な状況に置かれた人々が特定の地域に集中する傾向があるという一面と，同様の状況にある人々が集まることで特徴的な生活スタイルが明確なものとなり，それがさらなる排除の原因となるもう一つの側面」（p.5）を描き出すことが謳われている。この狙いは実現したのか，以下で検討してみたい。

5．2　西田の到達点

西田は1995年3月に，文化住宅が高密度に集積した大阪府W市の文化住宅街に1ヶ月間部屋を借り，主に若者を対象に生活史インタビュー調査，関係者への聞き取り調査を行った。この調査と，2011年春に再開した調査結果を踏まえ，貧困・生活不安定層が多く暮らす地域における，子どもから若者の移行過程を明らかにすることを目的に分析を進めていく。この分析では，W市の文化住宅街における生活文化が，そこで暮らす人びとの教育意識，職業志向の制約となっていることを示すわけだが，ここでの成果は次の2点に見ることができる。

第1に，貧困層の地域的集積をめぐる知見である。調査対象地域となったW市は，大阪府の高失業率地帯「インナーリングエリア」（妻木 2008）に位置している。1955年以降大量流入による人口増が見られ，特に1960年からの5年間は，178％の人口増加率で全国トップとなった。こうした大阪大都市圏への人口流入と階層的棲み分けをもたらす低階層出身者の都市への流入・定着過程を理解する上で，西田は文化住宅街という特有の居住形態に注意をうながしている。

文化住宅とは，2階建ての相対的に安い家賃の木造賃貸住宅で，高度経済成長期に流入した低い階層の人たちの受け皿となったものである。これは近年，貧困層の集積する地域として取り上げられることの多い公営住宅（宮内ほか 2014a）とは異なり，民間のものである。文化住宅入居者は，収入の下限が設定されていた公営住宅入居者[23]よりもさらに低層とされる。W市北部で木造賃貸住宅が乱立することで，低い階層の若い夫婦を中心に文化住宅への入居が進み，

流入した層によって人口が急増していく。また，この時期には転入と転出の同時並行がみられ，高い家賃負担や住宅取得が可能な経済的に安定度が高い層が多数転出したという。ここからは，貧困層が特定の空間に固定化されるプロセスが見えてくるだろう。

さて，関西圏の貧困をめぐる研究の多くは，「部落，在日，日雇，沖縄というタームを冠にした人々が，空間的には，東部から西南部にかけて，大阪環状線をとりまく三日月状に『現象』した」という知見（水内 2005：33）のように，その集住のあり方が主として社会地図分析で描き出されてきた。もっとも，こうした実証研究の蓄積に対しては，「貧困層が集積し，またそうした人々を生み出す地域という変数への注目は，貧困や社会的排除の空間的分布を描き出す以上には進んでいないようにも思える」（妻木 2012：490）という評価もある。これに対して当該書では，こうした集住地域で暮らす人びとの生活の内実を描き出している点が重要だろう。ここで見出されたのが，社会的排除の地域社会における顕在化，すなわち排除された人々が地域的に集積することによって，特定の生活文化・生活スタイルが形成され，学校での成功を困難にするプロセスである。これは，次の世代の不利な生活条件，排除状態を生み出す地域という要因であり，次の知見と関連する。

第2に，文化住宅街における社会関係や生活文化による貧困増幅プロセスの内実に関する知見である。W市では，文化住宅街特有の「部屋同士を隔てる壁も薄く，互いの生活を間近に感じざるを得ない」生活環境（p.22）のなかで，非常に親密な近隣関係，相互扶助が見られた。80年代半ばには子ども会，町内会活動も活発であり，W市近辺で豊富に社会関係が結ばれていた。この要因としては，壁の薄い文化住宅の居住環境，生活に不安を抱えた中での互助の必要性，子育て期の若い親が多かったこと，「挙家離村」的な家族の流入が挙げられている。これらの点から「低い階層の住民が多い地域では豊富な近隣関係が存在する」という都市社会学の知見が確認されるという[24]。

もっとも，この親密な社会関係に対しては否定的な評価がなされている点に注意が必要だ。W市の文化住宅街における生活文化として西田が強調するのは，計画的な貯蓄性向のなさである。「職人の町」＝「現実の生活の充実をよしとする」が，この地域の生活を表すキーワードの1つとされ，「現在の生活の優先を充実させる生活スタイル」が支配的であるとする。さらに，地域への愛着と高い評価によって，転出が可能な人でも住み続ける人が珍しくない一方で，子どもに高い教育達成を求める親の意識が遠方への転居に結びつくため，このプロセスは増幅されて進展していくこととなる。

こうした文化住宅街に見られる生活文化に対して西田は，「安定した月給で長期間の勤務が保障され昇給が見込まれる，という仕事ではない人々が多い中では」，「理にかなった暮らしぶり」であると解釈している（pp.29-30）。しかし，地域住民の同質性と，ちがった生活を営む人々を認識する契機が多くないため，多様な仕事や生活を認識した上での評価がなく，自らの生活を相対化する契機が少ない（p.32）ことによって，行動空間，意識される空間の狭さ，社会関係の狭さが生み出されるととらえている。これは，収入・昇給の見通しのなさ，不安定さ，高度経済期後半という時代背景，家郷から持ち込んだ生活スタイルによるものであり，ここからW市における教育意識と職業志向の特質が生まれ，W市の特徴である大学進学率の低さにつながっているとするのだ。

これまでの貧困と地域をめぐる研究では主として，共同性の「解体」，「レベル低下」（小澤 1993）といったネガティブな評価によりその問題がとらえられてきた。これに対して西田は文

化住宅街特有の文化として，関係性の豊かさだけでなく，住民が地域への強い愛着を持っていること，そして，一見すると社会的排除とは結びつかないような「のんびりした」,「暖かい」世界としてとらえられている（p.7）。西田が主張するのは，こうした共同性があることが逆説的に問題を生み出すことである。排除された人々が地域的に集積することが，特定の生活文化・生活スタイルの形成と学校での成功を困難にする。このプロセスにより，次の世代の不利な生活条件，排除状態を生み出すというのだ。これはコミュニティの解体が問題ではなく，共同性があるがゆえの問題という視点の提起[25]であり，地域における共同性の内実に迫った西田の議論の成果の1つと考えられる。

5．3　地域をとらえる手法の問題

以上の分析により，W市の文化住宅街に暮らす人びとの生活文化が生み出す意識，行動空間の閉鎖性・限定性の影響という地域的要因をあぶり出している。これは当該書全体を貫くテーマである，貧困を個人の責任として断罪する自己責任論に対抗する理論として見ることができる。しかし，いくつか奇妙に感じられる点がある。それは，地域的要因の重要性が指摘されてもなお，W市における文化住宅街の生活文化を形成する人びとの持つ問題性が浮き彫りにされてしまうことだ。これは，否定的な評価からW市の生活文化を救い出しつつも，別の形で否定的な評価を下している手法に帰因すると思われる。

西田は「W市の文化住宅街は，さまざまなデータが物語る通り，貧困，非行，家族関係の不安定さ，疾病等のさまざまな面で深刻な問題を抱えていることも事実である」点は認めている。事実であることとは認めつつも，「専門職スタッフのコメントや学者による調査データの解釈と，本論で描いてきた人々の地域生活の姿を突き合わせると，地域住民にとって『暖かい』,『住みやすい』と評価されている生活の諸相が，『問題の多い地域だ』とする認識枠組みを持つことで見えなくなってしまうのではないか」と批判する（p.39）。ここで問題なのは，実態として問題はあるが，その認識枠組みが間違っているとするロジックにある。このロジックの問題を2つの段階に分けて検討してみたい。

第1段階は，W市への「ガラの悪い」といった評判，「問題の多い地域」というとらえ方に対する批判である。当該書1章のもとになった論考（西田 2008：160）では，あるW市調査をめぐるエピソードが紹介されている。中学1年までW市で育ったA君が，「劣悪」という評価に対して違和感を提起したというものである。その例として西田が引用するのは，1984年に出版されたあるシンクタンクによる次のような位置づけである。「当地域では，過密居住に起因する親子関係，近隣関係のゆがみが，子どもの人間発達――こころとからだの発達――を阻害している。そしてそれは，子どもの健康――次代の人間形成――にとって見のがせない問題となっている」というものだ。このように，地域にかかわる専門職スタッフ，研究者は，否定的な評価，「問題」というとらえ方をすることが多い点を指摘する。その一方で，地域の人たちの語りからは「親密性」が語られるように評価のズレがある。この点を確認した上で，西田（2008：156）はズレを生み出す要因として，学歴社会における競争を当然視する研究者が持つ価値観が，文化住宅街の文化を「問題」として認識させてしまう点を指摘している。この点は，本稿1節で石岡が指摘した当該書の主張点の1つであり，研究者，専門家の認識枠組みによって切り取られた「ガラの悪さ」といった「定型像」を批判したものと言える。

第2段階では，そうした「ガラの悪い」,「問題の多い地域」という「定型像」を退けつつも，別

の形で文化住宅街における親密な共同性と生活文化を否定的に評価する。W市文化住宅街における「この地域以外の人からは否定的な解釈を導くことになるかもしれない」現在志向的な生活文化が，次の世代の不利な生活条件，排除状態を生み出すというのだ。もっとも，この解釈にあたっては，「安定した月給で長期間の勤務が保障され昇給が見込まれる，という仕事ではない人々が多い中では」，「理にかなった暮らしぶり」(p.30) であることを強調する。この主張が成り立つための鍵は，当事者の生活レベルの合理性を描き出せるか否かであろう。その合理性が明確に示されれば，「計画的ではない消費文化」や，「意識，行動空間の閉鎖性・限定性」など低階層の再生産を生み出す「問題」をかかえた地域としての断罪ではなく，「理にかなった」生活文化という理解につながるはずだ。そして，そこで暮らす人びとに「問題」があり責任があるとする自己責任論を乗り越えることが可能になる。しかし，以下の問題により，この点が十分に見えなくなってしまっている。

1つの問題は，西田が実証的にではなく，倫理的次元に力を入れ，それによって問題を解消しようとしている点にあると思われる。西田は，地域に対して道徳的悪のレッテルを貼り付けるスティグマ化に荷担してしまうことを慎重に避けようとしている。「地域社会学，都市社会学の論文において，市名，地域名を匿名化することは異例」であるが，「当該地域は『ガラが悪い』など否定的な評価を受ける傾向にある」こと，および「当地の事情についての情報の入手経路について秘匿することを希望することがあったため地域名は伏せている」(p.45) というように。しかし，個人の問題ではなく地域という要因の重要性を指摘するには，倫理的な配慮だけでなく実証的な分析の説得力が必要なはずだ。この点について，節を変えて考えてみよう。

5．4　貧困の自己責任論を乗り越える道筋

西田は，調査の過程での教訓として，「表面的には『問題』と見えるものであっても，当事者たちの生活経験，生活状況を踏まえた上での解釈」(p.120) を主張している。これは，佐藤健二が指摘するように，コミュニティ調査における「そこに住む経験がもつ身体や感覚への注目や，それをふまえたコミュニケーション分析という視点の組織化が弱かった」(佐藤 2011：119) 問題を乗り越える方法として表明されたものと考えられる[26]。しかし，それは貫徹されていない。本稿2節で宮内が指摘した調査データの扱い方の問題もあるが，ここでの最大の問題が，労働市場の分析がなく今後の課題とされている (p.46) ために，調査対象者の語りの内容がどのような合理性を持つのかについて判断することができず，結果として地域の文化の問題性のみが取り出されてしまうことにある。これは本稿1節で石岡が指摘した，「他者の合理性」の描き方をめぐる問題と見ることができる。

一例として，「職人の町」という概念へのこだわりを挙げることができる。実際に調査対象者が「職人」という社会的地位ではないにもかかわらず，調査での語りから見られる特徴的なキーワードが取り出され，それをつなぎ合わせて解釈されている。こうした生活をもたらす背景要因として「日給月給の不安定性，将来の昇給の見通しのなさ」は指摘されている (p.33) が，これがどのような労働市場のもとでの生活意識であるのか，構造的背景がわからないため，調査対象者の語りの解釈が困難になるのだ。

ここで「個人か社会か」という単純な二項対立を乗り越えるインパクトを持っていたはずの「貧困の文化」概念を用いた研究が，貧困状態にあることを当事者の「欠陥」としてとらえる傾向を強めてしまった隘路を，今一度確認しておくべきだろう (西村 2013：28)。問題のポイン

トは，経済的条件などを等閑視し，貧困層の文化的特質を列挙することに終始したことにあった。当該書の「エッセー2」「『貧困の文化』をどう語るか」で西田自身が語っているように，社会的経済的要因の軽視（p.118）が結果として構造的問題を捨象してしまうのである。にもかかわらず，西田自身が，この文化による説明の持つ隘路を招き寄せてしまっているのではないか。つまり，W市，およびその近辺の労働市場の状況など経済的条件を抜きに生活文化を語ることによって，どのような条件のもとで文化住宅街の生活文化の合理性が見られるかが不明確となってしまうのだ。その結果，文化住宅街の生活文化を「理にかなった」ものとして解釈することが難しくなり，そこで暮らす人びとの教育意識，職業志向の制約という「問題」のみがクローズアップされることになる。

以上のように，当該書1章は，貧困層の集積自体がさらなる機会の制約，集積効果を持つプロセスを明らかにすることによって，貧困と地域に関する重要な知見を導き出した一方で，地域という視点から貧困の自己責任論を乗り越える道筋としては限界があると言えるだろう。この問題を乗り越えるために必要なことは何か。1つの方法として，西田の議論の成果をさらに生かすためにも，2節で宮内が指摘しているようなテキストデータに収斂させる分析手法ではなく，地域の労働市場などの構造的要因をおさえつつ，人びとの語りの文脈から解釈していくことを指摘できるだろう。貧困の自己責任論に見られる個人の断罪を解消するためには，人びとに貧困の特性をひたすら発見し，それをつなぎ合わせて個人の貧困状況を描き出す「問題者発見レンズ」を，そこで暮らす人びとの〈生活＝文脈〉から相対化することが不可欠となる（宮内ほか2014b）。西田自身も主張しているその方法をさらに貫徹させていくことで，貧困と地域をとらえることから貧困の自己責任論を乗り越えるための理論・方法論を明確に展開することができるはずだ。（松宮）

おわりに

最後に，本稿を通じて明らかになった点をまとめたい。

第1に，『排除する社会・排除に抗する学校』では，具体的な調査を通じて得た知見ではなく，「万能型フレーム」へと議論を回収して，論考を締めくくるというスタイルが見出された。1節を担当した石岡は，「西田は調査からわかったことを敷衍するのではなく，貧困問題一般に該当する見識を述べて，各調査の結論とするのである。言い換えれば，具体的調査の内容がどうあっても該当する『万能型フレーム』とでも呼べるものを最後に添えることで，論考を締め続けている」と指摘する。「どのような属性にあろうと，共通に直面する困窮化の恐怖」という「近代の貧困問題の核心」に触れ，「属性内在的な貧しさの位相から属性を横断する『貧困・生活不安定層』の位相へと議論の地平を拡充」しながら論を進めてきたのにもかかわらず，「過度な一般化」によって，実証データとは無縁の結論が提示される。その結果，西田の思惑とは裏腹に，「若者の置かれた多様性」は切り捨てられてしまっていた。

第2に，この「万能型フレーム」への回収が生じるのは，西田のデータとの向き合い方が関係していた。2節を担当した宮内は，『排除する社会・排除に抗する学校』の記述から，西田の社会調査・フィールドワークの状況を分析している。そこからは，「『対象者』の生活に密着し，

西田自身の実感が捨象されずに，被調査者と調査者の生活に基づく視点」が見出される。しかし，このような視点で行われた社会調査・フィールドワークであるにもかかわらず，そこで得られたデータの取り扱い方には大きな問題が存在する。すなわち，「インタビューをテープ起こしした原稿（トランスクリプト）もフィールドノートも，実際に分析の対象とするのは『作文』と同じ文字情報のかたまりである」(p.69) という捉え方である。このような「同じ文字情報のかたまり」という見方が，「〈現場〉にいた証としての記述を挟み込みながら，社会調査・フィールドワーク時に感じた実感等のリフレクションを分析時に捨て去り，カード化の行為に伴う『脱文脈化』に専念する」という結果となる。理論レベルでの「万能型フレーム」への回収という「過度な一般化」は，方法レベルでのデータを「同じ文字情報のかたまり」とみなす「脱文脈化」と表裏の関係となって生じていることがわかる。

第3に，このような「脱文脈化」の作業は，当然ながら，データから読み取るべき決定的に重要な〈文脈〉を捉え損ねることになる。たとえば，3節で打越は，「貧困・生活不安定層」の「女の子」たちの再生産過程の再分析を行っている。西田は，「貧困・生活不安定層」の「女の子」には，「リスク感覚の不在」と，「遊び」への参入を外から「引き止め」る機能の不全が見られるとする。それらは，「学習離れ」，階層的同質性に基づく「偏狭さ」，外の世界への「誤解」によって支えられているとする。その結果，「社会的不平等，貧困の世代間再生産が次の世代においても生じる」(妻木 2005：63) とされる。この結論自体，打越も肯定できるとする。しかし，「それは西田の説明のように彼女らの生きる世界がせまく，知識が不足しているためではない。むしろ，彼女らは，家族や女の子らのつながりから，強固なモデルや価値規範を受け取り，それにもとづいてパートナーや将来像を積極的に選んでいる」と指摘する。たとえば，「女の子」たちの結婚や妊娠へのこだわりは，それが「自分が大事にされる，人生の中で唯一の経験だから」ではなく，「学校や家族からのサポートやケアが十分に期待できない女の子らの出産・育児において，なにより周囲の女の子とのつながりは大きな役割を果たす。だからこそ，その移行時期からずれることはつながりからの疎遠につながる」という「ライフステージの移行」という〈文脈〉を見出す。あるいは，パートナーとして中間層が受け入れられない状況を，中間層に対する「誤解」とする西田に対し，打越は「ガテン系の中でも技術職である大工さん，給料の高い鳶，そして休みのない『土木関係』」というブルーカラー内の職業の差異や意味づけに注目し，彼女らの意向を「フリーター，不安定就労，単純就労ではないものとして，積極的にパートナーの仕事を選択し」た合理的な結果だと解釈している。このような〈文脈〉の見落としは，西田の理論的・方法論的問題に起因すると捉えられる。

また第4に，西田は「排除に抗する学校」という，本書の主題にも通じる学校や教師の〈文脈〉の読み取りにも十分には成功していない。4節をまとめた新藤は，『排除する社会・排除に抗する学校』のうち，学校や教師に関する知見を整理した。そこでは，中間層出身者が主流である教師が，「貧困・生活不安定層」の生活や意識を理解しきれずに排除してしまうという問題と，そのなかでも社会的排除に抗する学校や教師の実践があることが確認された。しかし，排除する教師については，西田自身のデータからも指摘しうるのに，先行研究に代弁させるという形式が用いられていた。また，「排除に抗する学校」の土台を形成する〈文脈〉をなすであろう生徒指導の「ドロドロ」は，西田が一度は描写していながら，本書には収載されていなかった。このことは，3節の打越の指摘ともあわせると，西田が学校外や過去に広がる〈文脈〉を捨象して，現在の「排除に抗する学校」にのみ展望を見出そうとしたことを示している。ここには，学校

だけに焦点化する「学校化」の問題が存在しており，この点は今日の教育社会学が陥りがちな問題とも重なっているとされた。

加えて第5に，西田の議論は，分析枠組みにおける重大な課題も抱えていた。それは端的には，5節で松宮が指摘した労働市場等の構造レベルでの分析の欠落として浮かび上がる。松宮は，従来の貧困と地域研究においては，共同性の「解体」や「レベル低下」が指摘されてきたことを確認したうえで，西田は，「排除された人々が地域的に集積することが，特定の生活文化・生活スタイルの形成と学校での成功を困難にする」という「共同性があるがゆえの問題という視点の提起」を行った点を成果だと評価する。しかし，そのことが，貧困の自己責任論を乗り越えることにはつながらないとされる。なぜなら，西田の議論は，「『ガラの悪い』といった評判，『問題の多い地域』という捉え方に対する批判」が「実証的」な説得力を持ったものとしてではなく，「倫理的次元」を中心として行われているからである。その結果，「貧困・生活不安定層」が集住する地域は，「実態として問題はあるが，その認識枠組みが間違っているというロジック」を提示するにとどまる。その結果，「貧困・生活不安定層」が生活する地域社会の〈文脈〉は等閑視されることになっていた。だが，西田の問題意識を発展させるならば，松宮が指摘するように，「地域の労働市場などの構造的要因をおさえつつ，人びとの〈生活＝文脈〉から解釈し」，「当事者の生活レベルの合理性」を見出すことが求められるだろう。

以上，本稿を通じて，『排除する社会・排除に抗する学校』の検討から，西田だけでなく，貧困調査が陥りがちな諸課題を指摘してきた。それは，「はじめに」で宮内が指摘した西田の「記憶」の問題に収斂する。すなわち，西田は個々の〈現場〉に備わる〈文脈〉を徹底して捨象しているという問題である。そのため，あたかもスナップ写真を並べたアルバムのようなものとして，個々のデータが新たに与えられた〈文脈〉のもとに並べかえられていた。このようなデータへの向き合い方が，冒頭の「記憶」の問題に端的に示されている。このような姿勢から，結果として，各々のデータが持つ固有の〈文脈〉から浮かび上がるであろう結論にも結びつかず，「万能型フレーム」に回収されるという構成を示すことにつながっていた。

本稿で展開したように，『排除する社会・排除に抗する学校』には，さまざまな重要な知見に結びつく豊富なデータやヒントが満ちていた。それを，〈文脈〉へのこだわりをもって浮かび上がらせたのが本稿の諸論考である。社会調査・社会分析のプロセスにおいて，〈文脈〉が欠くべからざるものであることが，改めてここに示されただろう。（新藤）

付記：本稿は，JSPS 科研費25590128の助成を受けたものである。

注

1 以下，『排除する社会・排除に抗する学校』からの引用に限り，文献表記の煩雑を避けるため，ページ数のみを記載することとする。

2 西田は「ツッパリ」や「ヤンキー」を主題とするコミックなどの作品の分析を提唱する。一世を風靡し，今なお学園ドラマとしての金字塔と評価されている金八先生の1980年10月から放映された第2シリーズですら，直江喜一が演じた，隣の中学校の番長であった加藤優が母子家庭で育ち，借金に追われていたことに触れられていたが，他の「不良中学生」の家庭背景にはほとんど言及されていなかった。もし私たちが研究者であ

るならば，テレビドラマに学ぶのではなく，地道に社会調査・フィールドワークをすべきではないだろうか。生徒同士の関係性のみならず，その保護者の職業もまた無視できない要素となることは，私たちはよく知っている。例えば，父親が反社会的集団の関係者であるために，その子どもに中学生の誰もが手を出せなかったり，保護者が外国籍女性を多数雇用した飲食店経営者であり，その店に中学校の教員がよく出入りしているなど，現実の社会関係の方がきわめて複雑である。そして，そのようなことを中学生はしっかりと理解した上で，立ち回ろうとしているはずだ。

3 筆者が通学していた関西地方の公立中学校は「荒れた中学校」の一つだったと言える。校舎の廊下ではロケット花火が飛び交い，ネズミ花火が教室に投げ込まれることもあった。しかし，生徒が野放し状態で，やりたい放題だったわけではない。体育教師を中心とした生徒指導の先生方が，生徒を力尽くで圧制していた。風紀違反とされたならば，有無を言わさず，バリカンで頭髪を刈られた。筆者もまた体育館に呼び出され，竹刀や木刀で臀部を叩かれ，今もそのあとは痣となって残っている。パンチパーマ姿の一部の体育教師は，保健体育の授業時間以外は，校門を入ってすぐのところに大きな白い国産高級車を置き，ピカピカに光るようによく洗車していた。思い返せば，それは他校からの「襲撃」を避けるための一つの対抗手段だったのかもしれないが，生徒同士の関係のみならず，教員との関係性においても，中学生であった私たちは腕力がすべてであり，社会は力の強い者がのさばることをこれでもかというくらいに見せつけられ続けた。

4 こうした「他者の合理性」の理解が社会調査において非常に重要となる点は，岸政彦による非常にすぐれた解説がある（岸・石岡・丸山 2015近刊）。「他者の合理性」に関する社会認識をめぐって，筆者はこの論考から多くのことを教わった。

5 ブルデューやヴァカンは，「合理性」のかわりに「道理性」を頻繁に用いる。その理由については，Bourdieu & Wacquant（2000＝2006）の「序章」を参照。

6 初出の論文には以下のように記述されている。「私は一昨年（一九九四年）より大阪都市圏にあるW市内の文化住宅街をフィールドとした調査を始めた。（中略）調査は，生活史インタビューをメインとし，関係者へのヒアリングとデータ収集とによって補完することをめざしている。一九九五年の三月，春休みを利用して一ヶ月間アパートを借りて滞在し，八人に対する生活史調査をおこなったほか，小中高校教員，市役所職員，社会教育・保健・補導関係者など二十名弱に対してヒアリングをおこなった」（西田1996：151）。

7 この西田による「生活史インタビュー」については，当該書において厳密な定義はなされてはいない。「生活史インタビュー」が，社会学を含む質的研究において広く流布された方法とは言えない。さらに，谷編著（1996）における西田論文は，生活史研究として位置づけられるのかどうかは疑問である。

8 とは言え，西田による記述に注目しておきたい。西田が文化住宅街で何を見て，何を書きとめているのかを。柳田國男は「旅人の学」として，その場で生活しない者も，目に見えるモノを資料として採集できることを述べているが（柳田1934），一ヶ月間アパートを借りて滞在した西田は文化住宅街で何を見たのだろうか。「旅人」として民家を眺めながらも，そこで暮らす人たちの生活までも滲む描写をおこなった今和次郎の記述を思い起こす（今 1989）。

9 この作文の分析においても，西田は以下のような驚くべきことを述べている。「なお，引用文中で明らかに誤字とわかるものを修正したほか，一部句読点の変更をほどこしたことをお断りしておく」（p.50）。第一次資料をこのように修正してしまう態度に，「文字情報のかたまり」に対する西田の向かい合い方がよく表れているのではないだろうか。

10 斎藤清二・山田富秋・本山方子編『インタビューという実践』（新曜社，2014年）129-148頁に収録された拙稿で述べたように，中野卓編『口述の生活史－或る女の愛と呪いの日本近代』は同じ初版であっても第1刷と第2刷では内容が異なっていることに注意したい。拙稿は第2刷をもとにしている。

11 西田は方法論として触れてはいないが，西田によるカードを用いる分析手法はKJ法に近いと言えるかもしれない。グレイザーとストラウスによるGTA（Grounded Theory Approach）とも受け取られるかもしれないが，KJ法とGTAの「根本的に異なるところは，グラウンデッド理論が，概念的カテゴリーを礎石として概念的に理論構成するのに対して，KJ法では一度にバラバラにしたカードの意味的エッセンスをもとに創造的に総合して，図解による新しい『意味連関』をつくりだすところである」とやまだは指摘する（やまだ2003：26）。KJ法の生みの親である川喜多二郎自身もインタビューの中で「創造的総合」を強調していたが（川喜多ほか2003），カードを用いながらも，西田はKJ法の精神とは真逆のベクトルを志向していたように見える。

12 語源は，リクルート出版発行の就職情報雑誌『ガテン』からきている。その雑誌で求人していた土木・建築，そして運転手・調理師など技術職などをさしている。ただし現在では単に肉体労働者という意味で使われる場合が多く，西田もその意味で用いている。

13 本稿は西田のデータを再検討することが目的なので，打越による調査データは一切用いない。ただし本稿の構成と展開は，打越の今までの調査経験に裏付けられている。本稿の議論の裏付けとなる女の子を対象としたエスノグラフィは，今後，別稿にて発表予定である。

14 この「学習意欲の低いゼミ生」は，その後，公務員試験を突破し県庁の職員になったことが記されている。ただし，彼が「学習離れ」「偏狭」「誤解」に陥らなかったことやその背景については詳細には描かれていない。

15 西田の当該書は，重要な指摘やまとめの多くが妻木による引用によって書かれている。そのような事情から一部孫引きの形をとっている。

16 ここで父親が話す差別は，学歴による差別なのか，部落差別なのか。西田は当該書で「部落で生まれ育った対象者からは，交際相手の親から部落出身であることを理由に結婚を反対されるなど，部落差別に関連する経験が語られたケースもあるが，本論で言及するさまざまな経験は，部落差別に直接関連するものではない。」（p.74）と述べているため，その関連について，詳しくはわからない。ただし，どちらであるかは彼女の選択（特に結婚する場面）をめぐって，決して小さくはないものである。

17 西田はこれを36さんの語りとして紹介している。ただし，このような仮名使いは女の子たちが用いる何らかの手段による書き言葉でよく用いられるものであり，それをあたかも本人が語ったかのように扱っているように推測できる。宮内が指摘するデータの扱い方への違和感は，この点からも典型的に読み取れてしまう。

18 建築現場の足場を組む，もしくはそれを解体する仕事である。高所での作業，仕事のきつさから「現場の王様」と言われる。また建物を作る際に欠かせないにもかかわらず，なんの形跡も残さないことに美しさを感じる従業員は多い。

19 この他にも，鳶と大工が一人前となることで独立することを見据えることが可能であることもガテン系のなかでの位置付けをみる際に重要な視点である。

20 教師には，これも前稿で宮内洋が貧困研究者について指摘したように，〈問題者発見レンズ〉に絡めとられないように留意しつつ，ソーシャルワーカー的態度で関わることが望まれる（宮内ほか 2014b：209）。

21 ここでの〈文脈〉の用法については，宮内（2008）で提起された〈生活―文脈主義〉の考え方を念頭に置いている。

22 臨床的な教育社会学研究の可能性を比較的早期に探った研究として，志水（1996）がある。この論文では，厳密にいえば「臨床的学校社会学の可能性」が検討されているが，広く教育社会学にも通じるものと考えられる。

23 ここでの公営住宅とは，収入下限のあった1種住宅のことと思われる。

24 この点は西田による別の調査研究（西田 2002：533）でも指摘されている。

25 もっとも，当該書1章最終節「半世紀後の文化住宅街」では，排除状況が近年の経済状況の急変により「底抜

け」状態に陥りつつあるのではないかとされているように，この議論の前提が崩れているように見える。

26 この点に関連してスピッカーは，ブースによる先駆的な貧困調査では，貧困者の住宅や環境など地域的要因が重視されていたものの，その後の貧困調査では貧困線の議論に集中し，見失われてしまったことを指摘する（スピッカー 2007=2008：90-91）。

文献

Bourdieu, Pierre and Wacquant, Loïc, 1992, *An Invitation to Reflexive Sociology*, University of Chicago Press.（＝2007，水島和則訳『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』藤原書店.）

————, 2000, *Les structures sociales de l'économie,* Le Seuil（＝2006, 山田鋭夫・渡辺純子訳『住宅市場の社会経済学』藤原書店.）

部落解放・人権研究所編，2005,『排除される若者たち――フリーターと不平等の再生産』解放出版社.

Gans,H.J., 1982, *Urban Villagers,* The Free Press.（＝2006, 松本康訳『都市の村人たち』ハーベスト社.）

Giroux, H., 1992, *Border Crossings：Cultural Workers and the Politics of Education,* Routledge.（＝2005, 東野充成訳「越境する教育言説――モダニズム・ポストモダニズム・フェミニズム」A.H.ハルゼー／H.ローダー／P.ブラウン／A.S.ウェルズ編（住田正樹・秋永雄一・吉本圭一編訳）『教育社会学――第三のソリューション』九州大学出版会：161-95. 部分訳）

Goffman, E., 1961, *Asylums：Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates,* Doubleday.（＝1984，石黒毅訳『アサイラム――施設被収容者の日常世界』誠信書房.）

Illich, I., 1971, *Deschooling Society,* Harper & Row.（＝1977，東洋・小澤周三訳『脱学校の社会』東京創元社.）

石岡丈昇，2011,「対象化された貧困――マニラのボクシングジムの存立機制」『理論と動態』4：42-58.

川喜多二郎・松沢哲郎・やまだようこ，2003,「ＫＪ法の原点と核心を語る―川喜多二郎さんインタビュー」『質的心理学研究』2：6-28.

籠山京，1953,「貧困家庭の学童における問題」『教育社会学研究』4：18-27.

木下健二，1997,「実践的立場から見た戦後教育の総括(1)―民主教育の中の差別性」『同和問題研究』19：103-13.

岸政彦・石岡丈昇・丸山里美，2015（近刊）,『質的社会調査のすすめ（仮）』有斐閣.

今和次郎，1989,『日本の民家』岩波書店（初版は1922年，鈴木書店）.

久冨善之編，1993,『豊かさの底辺に生きる――学校システムと弱者の再生産』青木書店.

三宅和夫，1957,「学級における児童の地位と学習場面での反応について――家庭の社会階層別による検討」『教育社会学研究』11：15-27.

宮内洋，2008,「〈生活―文脈主義〉の質的心理学」無藤隆・麻生武編『質的心理学講座1 育ちと学びの生成』東京大学出版会：191-215.

————, 2010a,「インタビューにおける語りの扱いの相違：ある女性の〈非科学的〉な語りをもとに」『質的心理学フォーラム』創刊号：58-65.（後に，斎藤清二・山田富秋・本山方子編，2014,『インタビューという実践』新曜社，129-148頁に収録）

————, 2010b,「はじめに」宮内洋・好井裕明編『〈当事者〉をめぐる社会学―調査での出会いを通して―』北大路書房：ｉ－xi.

宮内洋・松宮朝・新藤慶・石岡丈昇・打越正行，2014a,「新たな貧困調査の構想のために―日本国内の貧困研究の再検討から―」『愛知県立大学教育福祉学部論集』62：123-135.

————, 2014b,「貧困調査のクリティーク（1）―『豊かさの底辺に生きる』再考―」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』120：199-230.

水内俊雄, 2005,「マイノリティ／周縁からみた戦後大阪の空間と社会」『日本都市社会学会年報』23:32-56.
中川清, 1985,『日本の都市下層』勁草書房.
中野卓, 1980,『口述の生活史－或る女の愛と呪いの日本近代（初版第2刷）』御茶の水書房.
Neisser,Ulric.:selections and commentary, 1982, *Memory observed: Remembering in natural contexts,* W.H.Freeman and Company.（＝1988, 富田達彦訳『観察された記憶―自然文脈での想起（上）』誠信書房.）
西田芳正, 1994,「生徒指導のエスノグラフィー――教育困難校における『つながる指導』とその背景」『社會問題研究』43（2）: 323-52.
――――, 1996,「文化住宅の青春―低階層集住地域における教育・地位達成―」谷富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社:149-178.
――――, 2002,「エスニシティの〈潜在―顕在〉メカニズム」谷富夫編著『民族関係における結合と分離』ミネルヴァ書房:512-540.
――――, 2008,「文化住宅街の青春」谷富夫編『新版ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社:132-161.
――――, 2010,「対象者の世界を知るために」谷富夫・山本努編『よくわかる質的社会調査 プロセス編』ミネルヴァ書房:136-139.
――――, 2012,『排除する社会・排除に抗する学校』大阪大学出版会.
西村貴直, 2013,『貧困をどのように捉えるか』春風社.
西澤晃彦, 2010,『貧者の領域』河出書房新社.
Osler, A.and Vincent, K., 2003, *Girls and Exclusion: Rethinking the Agenda,* Routledge, Falmer.
小澤浩明, 1993,「地域社会での＜階層化秩序＞と『生活困難層』」久冨善之編著『豊かさの底辺を生きる』青木書店:179-216.
佐藤健二, 2011,『社会調査史のリテラシー』新曜社.
志水宏吉, 1996,「臨床的学校社会学の可能性」『教育社会学研究』59: 55-67.
――――, 1998,「教育研究におけるエスノグラフィーの可能性――『臨床の知』の生成に向けて」志水宏吉編『教育のエスノグラフィー――学校現場のいま』嵯峨野書院:1-28.
――――・徳田耕造編, 1991,『よみがえれ公立中学――尼崎市立「南」中学校のエスノグラフィー』有信堂.
Spicker,P., 2007, *The Idea of Poverty,* Policy Press.（＝2008, 圷洋一監訳『貧困の概念』生活書院.）
谷富夫編, 1996,『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社.
妻木進吾, 2005,「本当に不利な立場に置かれた若者たち――フリーターの析出に見られる不平等の世代間再生産」部落解放・人権研究所編『排除される若者たち――フリーターと不平等の再生産』解放出版社:24-65.
――――, 2008,「GISを利用した京阪神大都市圏の圏域構成変化」浅野慎一ほか編『京阪神都市圏の重層的なりたち』昭和堂:53-66.
――――, 2012,「貧困・社会的排除の地域的出現」『社会学評論』62（4）:489-503.
やまだようこ, 2003,「KJ法とグラウンデッド理論, そしてインタビューにおける語り手と聞き手の関係性」『質的心理学研究』2:26－28.
柳田國男, 1934,『民間伝承論』共立社.

A Critique of the Research of Poverty in Japan (2) : Thinking from the *"Haijyo Suru Syakai Haijyo ni Kousuru Gakkou"*

Hiroshi MIYAUCHI, Ashita MATSUMIYA, Kei SHINDO
Tomonori ISHIOKA, Masayuki UCHIKOSHI

Key Words

research of poverty, context, "bunka jutaku", rationality of others,
the thought process that all of the result is the same

Abstract

This review article concerns the *Haijyo suru syakai haijyo ni kousuru gakkou* (Yoshimasa Nishida, 2012, Osaka: Osaka University Press) as the second fruit of our research group, which engages in elaborating the theories and concepts of poverty research. The book constitutes fragmented research results dating from the 1990s based on the surveys of the *buraku* and the young working poor in Japan. The author composes these fragmented topics into a theme of social exclusion of the poor. The case studies on *bunka jutaku* and downtown areas are described in terms of the livelihoods and educational expectations of the young residents belonging to the "social stratum of poverty and instability." Our research group rigorously reviews the book on theoretical and methodological levels and raises alternative interpretations of the topics of youth, schooling, and the local community. We conclude that the book definitely pays no attention to the life contexts of the research subjects and ignores their realities. It seems that rather than deconstructing the myth of poverty and social exclusion, the book ends up reinforcing it. The book produces only immaterial and conventional discussions.